

トマス・アキナス 『定期討論集 靈的被造物について』第八項 試訳

著者	石田 隆太
著者別名	ISHIDA Ryuta
雑誌名	宗教学・比較思想学論集
巻	18
ページ	77-111
発行年	2017-02
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146114

トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』

第八項 試訳

石田 隆太

はじめに

本稿は、トマス・アクィナスによる『定期討論集 霊的被造物について』(*Questio disputata de spiritualibus creaturis*)の全訳を目指す試みの一環であり、以下の拙稿の続編である。

- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第一項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』, 第15号, pp.33-57, 2014年. [石田2014aと略記]
- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第二項 試訳」, 『筑波哲学』, 第22号, pp.129-53, 2014年. [石田2014bと略記]
- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第三項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』, 第16号, pp.57-91, 2015年. [石田2015と略記]
- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第四項 試訳」, 『古典古代学』, 第8号, pp.31-56, 2016年. [石田2016aと略記]
- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第五項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』, 第17号, pp.105-27, 2016年. [石田2016bと略記]
- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第六項 試訳」, 『筑波哲学』, 第24号, pp.39-63, 2016年. [石田2016cと略記]
- 石田隆太, 「トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第七項 試訳」, 『古典古代学』, 第9号, 2017年. (近刊予定)

この試訳の主要な意図に関してはこれまでの稿を参照されたい。以下では、これまでの稿と度々重複するところではあるが、便宜のために凡例を載せることとする。

凡例

- ・訳出にあたっては次のレオ版を底本とした。

COS, J. ed. *Sancti Thomae de Aquino, Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, t.24.2: *Questio disputata de spiritualibus creaturis*. Roma-Paris: Commissio Leonina-Les Éditions du Cerf, 2000.

- ・他の版としては次の批判的校訂版も参照した。

KEELER, L. W. ed. *Sancti Thomæ Aquinatis, Tractatus de spiritualibus creaturis*. Romæ: Apud ædes Universitatis Gregorianæ, 1946. [Keeler と略記]

- ・ただし、レオ版のテキストにはいくつか読解に難のある箇所があるため、場合によって次のものが提案する読みに従った。

GULDENTOPS, G. & STEEL, C. “Critical Study: The Leonine Edition of *De spiritualibus creaturis*.” *Recherches de théologie et philosophie médiévales*, 68(1), 2001, pp.180-203. [G&S と略記]

- ・今回参照した『定期討論集 霊的被造物について』の近代語訳は次の通りである。

BRENET, J.-B. *Les créatures spirituelles*. Paris: Librairie philosophique J.Vrin, 2010. [仏訳]

FITZPATRICK, M. C. & Wellmuth, J. J. *On Spiritual Creatures*. Milwaukee, Wisconsin: Marquette University Press, 1949. [英訳]

GOODWIN, C. R. “A Translation of the *Quæstio disputata de spiritualibus creaturis* of St Thomas Aquinas, with Accompanying Notes.” M. A. thesis, Australian Catholic University, 2002. [英訳]

SAVAGNONE, G. “Le creature spirituali.” In S. Tommaso d’Aquino, *Le questioni disputate*, vol.4, pp.522-809. Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2001. [伊訳]

- ・訳者自身による訳文中の [] は訳者による補いであり、〔 〕 は原語の引用である。
- ・訳語の選定にあたってはトマス・アキナスによる著作の既存の日本語訳等を主に参照したが、参照したものの一例として次のものを挙げておく。

長倉久子, 蒔苗暢夫, 大森正樹 編『トマス・アキナス『神学大全』語彙集 (羅和) 一創文社版, 中央公論版による一』, 新世社, 1988年.

- ・註にて使用した略号の一覧は次の通りである (上で示したものは除く)。なお慣例に従い、アリストテレスの著作にはベッカー版の頁数と行数を付した。

B.

Doctoris Seraphici S. Bonaventuræ S. R. E. Episcopi Cardinalis, Opera omnia iussu et auctoritate R.^M P. Bernardini a Portu Romanino totius Ordinis Minorum S. P. Francisci Ministri Generalis edita studio et cura Pp. Collegii a S. Bonaventura ad plurimos codices mss. emendata anecdotis aucta prolegomenis scholiis notisque illustrata. Ad Claras Aquas (Quaracchi), prope Florentiam: Ex Typographia Collegii S. Bonaventuræ, 1882-9.

Borgnet

BORNET, S. C. A. ed. *B. Alberti Magni, Ratisbonensis Episcopi, Ordinis Prædicatorum, Opera omnia, ex editione lugdunensi religiose castigata, et pro auctoritatibus ad fidem vulgatæ versionis accuratiorumque patrologiæ textuum revocata, auctaque B. Alberti vita ac bibliographia suorum operum a Pp. Quétyf et Echard exaratis, etiam revisa et locupletata*. Parisiis: Apud Ludovicum Vivès, 1890-9.

Buytaert

BUYTAERT, E. M. ed. *Saint John Damascene, De fide orthodoxa. Versions of Burgundio and Cerbanus*. St. Bonaventure, N. Y., Louvain, Paderborn: The Franciscan Institute, E. Nauwelaerts, F. Schöningh, 1955.

Col.

Beati Doctoris Ecclesiae Alberti Magni Ordinis Fratrum Prædicatorum Episcopi, Opera omnia ad fidem codicum manuscriptorum edenda apparatu critico notis prolegomenis indicibus instruenda curavit Institutum Alberti Magni Coloniense. Monasterii Westfalorum in ædibus Aschendorff, 1951-.

De Rijk

DE RIJK, L. M. ed. *Petrus Abælardus, Dialectica. First Complete Edition of the Parisian Manuscript with an Introduction.* Assen: Van Gorcum & Comp. N. V., 1970².

EM

CATHALA, M.-R. & SPIAZZI, R. M. ed. *S. Thomæ Aquinatis Doctoris Angelici, In duodecim libros metaphysicorum Aristotelis expositio.* Torino: Marietti, 1977³.

Gauthier

GAUTHIER, R. A. ed. *Anonymi, Magistri Artium, Lectura in librum de anima a quodam discipulo reportata (Ms. Roma Naz. V. E. 828).* Grottaferrata, Romæ: Editiones Collegii S. Bonaventuræ ad Claras Aquas, 1985.

Hamesse

HAMESSE, J. ed. *Les Auctoritates Aristotelis. Un florilège médiéval. Étude historique et édition critique.* Louvain, Paris: Publications Universitaires, Béatrice-Nauwelaerts, 1974.

Justinianus

JUSTINIANUS, A. ed. *Rabi Mossei Ægyptii, Dux seu Director dubitantium aut perplexorum, in treis Libros divisus, & summa accuratione Reverendi patris Augustini Iustiniani ordinis Prædicatorii Nebiensiu Episcopi recognitus. Cuius index seu tabella ad calcem totius apponetur operis.* Parisiis, 1520.

L.

Sancti Thomæ de Aquino, Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita. Romæ, 1882-.

Litt

LITT, Th. *Les corps célestes dans l'univers de saint Thomas d'Aquin.* Louvain, Paris: Publications Universitaires, Béatrice-Nauwelaerts, 1963.

P.

Sancti Thomæ Aquinatis Doctoris Angelici Ordinis Prædicatorum, Opera omnia ad fidem optimarum editionum accurate recognita. Parmæ: Typis P. Fiaccadori, 1852-73.

PL

Migne, J.-P. ed. *Patrologiæ cursus completus omnium SS. Patrum, doctorum scriptorumque ecclesiasticorum sive Latinorum, sive Græcorum.* Series Latina. Parisiis, 2 ed.

QD

S. Thomæ Aquinatis Doctoris Angelici, Quæstiones disputatæ. Taurini-Romæ: Marietti, 1964-5¹⁰.

SEP

CAI, P. R. ed. *S. Thomæ Aquinatis Doctoris Angelici, Super epistolas S. Pauli lectura.* Taurini-Romæ: Marietti, 1953⁸.

SS

MANDONNET, P. & MOOS, M. F. ed. *S. Thomæ Aquinatis Doctoris Communis Ecclesiæ, Scriptum super libros Sententiarum magistri Petri Lombardi*. Parisiis: P. Lethielleux, 1929-47.

ST

Doctoris Irrefragabilis Alexandri de Hales Ordinis Minorum, Summa theologica iussu et auctoritate Rmi P. Bonaventuræ Marrani totius Ordinis Fratrum Minorum Ministri Generalis studio et cura Pp. Collegii S. Bonaventuræ ad fidem codicum edita. Ad Claras Aquas (Quaracchi), prope Florentiam: Ex Typographia Collegii S. Bonaventuræ, 1924-48.

アウグスティヌス著作集

『アウグスティヌス著作集』, 教文館, 1979年～.

アリストテレス全集旧

出隆 (監修), 『アリストテレス全集』, 岩波書店, 1968-73年.

アリストテレス全集新

内山勝利, 神崎繁, 中畑正志 (監修), 『アリストテレス全集』, 岩波書店, 2013年～.

石田 2016d

石田隆太, 「質料概念と天使の非質料性——トマス・アクィナスによる天使論の一側面」, 『中世哲学研究』, 第35号, 22-40頁, 2016年.

井上 a

井上淳, 「人間の魂は存在的に身体から分離しているのであるか」——トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第2問題について, 『南山神学』, 第38号, 145-87頁, 2015年.

井上 b

井上淳, 「可能知性もしくは知性的な魂は全ての人に一つであるか」——トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第3問題について, 『南山神学』, 第39号, 181-223頁, 2016年.

井上 c

井上淳, 「トマス・アクィナスにおける分離した魂の認識——『定期討論集 デ・アニマ』第十四問題「人間の魂の不死性について」——翻訳と註解」, 『南山神学』, 第28号, 25-53頁, 2005年.

川添

『トマス・アクィナスの心身問題——『対異教徒大全』第2巻より』, 川添信介 (訳註), 知泉書館, 2009年.

キリスト教古典叢書

上智大学神学部 (編), P・ネメシエギ, 小高毅 (責任編集), 『キリスト教古典叢書』, 創文社, 1963-95年.

キリスト教神秘主義著作集

『キリスト教神秘主義著作集』, 教文館, 1989年～.

原因論

ヴェンサン・マリー・プリオット 大鹿一正 (共訳), 『原因論 聖トマス・デ・ア
クイノ 原因論註解』, 聖トマス学院, 1967 年.

酒井

聖トマス・アクィナス, 『神在す(異教徒に與ふる大要、第一卷)』, 酒井瞭吉(譯),
ルーペルト・エンデルレ書店, 中央出版社, 1944 年.

神学大全

高田三郎ほか (訳), 『神学大全』, 創文社, 1960-2012 年.

中世思想原典集成

上智大学中世思想研究所 (監修), 『中世思想原典集成』, 平凡社, 1992-2002 年.

長倉

トマス・アクィナス, 『神秘と学知——『ボエティウス「三位一体論」に寄せて』
翻訳と研究』, 長倉久子 (訳註), 創文社, 1996 年.

保井

トマス・アクィナス, 『ヨブ記註解』, 保井亮人 (訳), 知泉書館, 2016 年.

山下

山下正男, 『ペトルス・ヒスパヌス 論理学綱要——その研究と翻訳』, 京都大
学人文科学研究所, 1981 年.

山本 a

トマス・アクィナス, 「神の知について (真理論 第2 問題)」, 山本耕平 (訳), 聖
カタリナ大学, 『人間文化研究所紀要』, 第13 号, 117-96 頁, 2008 年.

山本 b

トマス・アクィナス, 「摂理と予定 (真理論 第5,6 問題)」, 山本耕平 (訳), 聖カ
タリナ女子大学キリスト教研究所, 『研究所紀要』, 第6 号, 101-78 頁, 2003 年.

山本 c

トマス・アクィナス, 「善の欲求について (真理論 第22 問題)」, 山本耕平 (訳),
聖カタリナ大学, 『人間文化研究所紀要』, 第14 号, 173-230 頁, 2009 年.

山本 d

トマス・アクィナス, 「神の意志について (真理論 第23 問題)」, 山本耕平 (訳),
聖カタリナ大学, 『人間文化研究所紀要』, 第15 号, 113-52 頁, 2010 年.

・本稿では註にて他の文献からの引用を大量に行っているが、その中で特に引用元を明
記していない日本語訳はすべて拙訳であることを断っておく。

試訳

靈的被造物について

第八項¹

第八に問題とされるのは、すべての天使が種という点で互いに異なるのか否かである。

【異論】

そしてそうではないと思われる²。

一. アウグスティヌスは『エンキリディオン』で「人間たちにおいてあった理性的被造物は、諸々の罪と罰によってその被造物全体が消失してしまった限りで、部分的に回復させられるのに」値したと言う³。こうしたことに基づくと次のように議論される。もしすべての天使が種の本性に即して互いに異なっていたとするなら、複数の天使が回復不能なほどに墮落すると、複数の本性が回復不能なほどに消失してしまっていたことになるだろう。しかるに、導入された権威 [すなわちアウグスティヌス『エンキリディオン』] に基づくと明らかなように、何らかの理性的本性が全体的に消失するというようなことを神の摂理は被らない。それゆえ、すべての天使が種の本性に即して互いに異なるわけではない。

二. さらに、何らかのものどもが神——それにはいかなる相異性もない——に近接的であればあるほど、それだけ一層それらはより少なく相異している。ところで、本性の秩序に即して天使たちは、人間たちよりも神に近接的である。それに対して、数と種という点で異なるものどもの方が、数という点では異なり種という点では合致するものどもよりも互いに相異している。したがって、人間たちは種ではなくて数という点でのみ異なるのだから、天使たちも種という点では異ならないと思われる。

三. さらに、形相的原理における何らかのものどもの合致は何らかのものどもを種という点で同じものたらしめるのに対して、質料的原理における差異は数という点のみ [何らかのものどもを] 異ならしめる⁴。ところで、上述のように⁵、天使たちにおいてあること [esse] そのものは形相的原理として天使の本質と関わる。したがって、すべての天使は、あることにおいては合致するのに対して、本質に即しては異なるのだから、天使たちは、種ではなくて数という点でのみ異なると思われる。

四. さらに、自存する被造的実体はすべて、共通な種の何らかの本性の下に含まれた個体であるからして、もし個体が複合体であるとするなら、種の本性は複合体の論理 [ratio] に即して個体について述定されることになる。それに対して、もし個体が単純であったとしたなら、種の本性は諸々の単純な論理に即して個体について述定されることになる。ところで、天使は自存する被造的実体である。したがって、天使が質料と形相から複合されているとするか、あるいは単純であるとするかであるなら、天使は種の何らかの本性の下に含まれるのでなければならない。しかるに、複数の主体 [suppositum] を持ちうるということは種の本性から [何も] 取り去らない。また同様に、もし個体が自分と同等な何らかの個体を同じ種において持つとしても、そのことは種の下に存在する個体から [何も] 取り去らない。それゆえ、複数の天使が一つの種にあるということ

は可能であると思われる。ところで、『自然学』第3巻で言われるように、「永続的なものどもにおいては、あること〔esse〕と可能であることは異ならない」⁶。それゆえ、天使たちにおいては複数の個体が一つの種にある。

五. さらに、天使たちにおいては完全な愛好〔dilectio〕がある。したがって、完全な愛好に属することは何も天使たちから除去されるべきではない。しかるに、複数の天使が一つの種にあるということは愛好の完全性に属する。なぜなら、『シラ書』第14章「すべての動物は自身に類似するものを愛好する」に即せば⁷、或る一つの種の動物はすべて、互いを本性的に愛好するからである。それゆえ、天使たちにおいては複数の天使が一つの種にある。

六. さらに、ボエティウスに即せば種のみが定義されるのだから⁸、定義において合致するものは何であれ種において合致すると思われる。しかるに、ダマスケヌスが『正統信仰論』第3巻で措定する定義、すなわち「天使とは、常に可動的で、裁量という点で自由で、非物体的で、神に奉仕する、本性によってではなく恩寵に即して不死性を受け入れる、知性的実体である」⁹においてすべての天使は合致する。それゆえ、すべての天使は一つの種にある。

七. さらに、本性の秩序に即して天使たちは人間たちよりも神に近接的である。しかるに、神においては数に即して一つの本性に三つのペルソナがある。したがって、人間たちにおいては種に即して一つの本性に複数のペルソナがあるのだから、ましてなおさら天使たちにおいては種の一つの本性において合致する複数のペルソナがあると思われる。

八. さらに、グレゴリウスが言うには、天上のかの祖国——そこには善の充満がある——においては、もし或るものどもが卓越した仕方で与えられても、無論のこと何も単一の仕方で所有されない。というのも、何らかの者たちは、無論のことすべての者が持っているものどもを他の者たちよりも崇高な仕方で所有するがゆえに、すべてのものはすべての者においてあるが、確かに同等にあるわけではないからである¹⁰。それゆえ、天使たちにおいては、より多いということとより少ないということに即してのみ差異がある。しかるに、より多いということとより少ないということは種を相異化しない¹¹。それゆえ、天使たちは種という点で異なる。

九. さらに、最も高貴なものにおいて合致するものは何であれ種において合致する。なぜなら、種差は類から見れば形相的であるがゆえに、種の下に措定するものの方が類の下に措定するものよりも高貴だからである。しかるに、すべての天使は、天使たちにおいてある最も高貴なもの、すなわち知性的本性において合致する。それゆえ、すべての天使は種において合致する¹²。

十. さらに、もし何らかの類が、それらの一方が他方よりも不完全であるような二つの差異を通じて分割されるとするなら、非理性的ということが理性的ということよりも複数の種を通じて多数化されるように、より不完全な種差はより完全な種差よりも多く多数化される。ところで、靈的実体は、[物体と]合一されるということと合一されえないということを通じて分割される。他方で、靈的諸実体においては物体と合一されるということの方が不完全である。したがって、物体と合一される靈的実体、すなわち人間の魂は多数の種に区別されないのだから、ましてなおさら[物体と]合一

されえない霊的実体、すなわち天使は多数の種を通じて多数化されない。

十一. さらに、教皇ボニファティウス [2世] が言うには、「戦う教会 [ecclesia militans] における諸々の奉仕は天上の軍団——それにおいて天使たちは秩序と権能において異なる——を範型としている¹³。しかるに、戦う教会において秩序と権能の差異は人間たちを種に即して異ならしめない。それゆえ、天使たちがいる天上の軍団においても、天使たちは、相異なる秩序ないし位階にはあるのであっても、種という点では異なるない。

十二. さらに、より下位の諸元素は植物や動物たちによって、星空 [caelum sidereum] は星々や太陽や月によって飾られているのと同様に、浄化天 [caelum empyreum] ¹⁴も天使たちによって飾られている。しかるに、植物や動物たちにおいては同じ種にある多数のものが見出される。また同様に、すべての星は一つの種にあると思われる。なぜなら、星々は一つの最も高貴な形相——それは光 [lux] である——において共通するからである。それゆえ、同等の論理によって、すべての天使かあるいは何らかの天使たちが一つの種において合致すると思われる。

十三. さらに、もし複数の天使が一つの種において合致すると措定されないとするなら、こうしたことは、天使たちにおいて質料がないということのゆえにのみである。しかるに、質料の排除 [remotio] は、諸々の個体の複数性だけではなくて [種の] 一性をも取り除く。なぜなら、質料は個体化の原理であるがゆえに¹⁵、個体は質料を通じてのみ種の下に措定されるからである。それゆえ、もし天使たちが或る諸々の個体であると措定されることが必然であるなら、同等の論理によって、天使たちは一つの種において複数であるということも措定されうることになる。

十四. さらに、哲学者 [アリストテレス] に即せば、「質料から分離されているものどもにおいて知解するものと知解されるものは同じである」¹⁶。したがって、もし天使たちが質料なしのものであったとするなら、知解する天使と知解される天使は同じであったことになるだろう。しかるに、任意の天使は他の任意の天使を知解する。それゆえ、一体の天使しかいなくなってしまうということが帰結してしまっただろうが、それは偽である。それゆえ、天使たちは質料なしのものであるということが措定されるべきではなく、そのようなわけで、すべての天使は種という点で異なるということも措定されるべきではない。

十五. さらに、数は量——それは質料なしのものではない——の種である。したがって、もし天使たちにおいて質料がなかったとするなら、天使たちにおいては数がなかったことになってしまっただろうが、それは偽である。それゆえ、先述と同じである。

十六. さらに、ラビ・モイセス [マイモニデス] が言うように、質料なしのものであるものどもにおいては原因と原因されるものに即してでなければ多数化はない¹⁷。したがって、もし天使たちが質料なしのものであるなら、天使たちにおいて多数性はないか、あるいは [原因である] 一方が [原因されるものである] 他方の原因であるかだが、その両方が偽である。それゆえ、先述と同じである。

十七. さらに、諸々の被造物において神の善性が再現されるために、諸々の被造物は神によって創設されている。しかるに、天使の一つの種においての方が人間の一つの種においてよりも完全に神の善性は再現される。それゆえ、天使たちの複数の種を措定しなくてもよい。

十八. さらには、相異なる種——それは対立的に分割される——は種差に即して異なる。ところで、天使たちの多数性が措定されるほど多くの対立する種差は指定されえない。それゆえ、すべての天使が種という点で異なるわけではない。

【反対異論】

しかし以上に反対する。

一. もし何らかの天使たちが種という点で合致するとするなら、こうしたことは一つの秩序にある天使たちに最大限に当てはまると思われる。しかし、一つの秩序にある天使たちは種において合致しない。というのも、ディオニシウスが『天使位階論』第10章で言うように、同じ秩序において「第一の天使たち、中間の天使たち、最後の天使たち」がいるからである¹⁸。ところで、[アリストテレス]『形而上学』第3巻で言われるように、より先ということとより後ということに即して種は自分の諸々の個体について述定されない¹⁹。それゆえ、一つの種に複数の天使があるのではない²⁰。

二. さらには、一つのものにおいて保存されえない種の本性が、複数のものにおいて保存されるということのために、可滅的であるものどもだけは一つの種において数に即して多数化されていると思われる。しかるに、天使たちは不可滅的である。それゆえ、一つの種に複数の天使があるのではない²¹。

三. さらには、一つの種における諸々の個体の多数化は質料の分割を通じたものである。しかるに、アウグスティヌスが『告白』第13巻で言うように、質料は「ほとんど無」である一方で、天使たちは「ほとんど神」であるのだから、天使たちは非質料的である²²。それゆえ、天使たちにおいて同じ種における諸々の個体の多数化はない²³。

【主文】

解答。以下のことが言われるべきである。この問題をめぐっては相異なる仕方で何らかの人々が語ってきた²⁴。すなわち、或る人々は、すべての霊的実体は一つの種に属していると言ったのに対して²⁵、他の人々は、すべての天使は一つの位階かまた一つの秩序にあると言った一方で²⁶、他の人々は、すべての天使は互いに種という点で異なると言った²⁷。三つの論理のゆえに私にもそうである [すなわち、すべての天使は互いに種という点で異なる] と思われる²⁸。

第一の論理は天使たちの実体の条件 [condicio] に基づいて解される。その理由は次の通りである。天使たちは、上で認められたように²⁹質料を欠いて自存する単純な形相であるか、あるいは質料と形相から複合された形相であるかであると言うのが必然である。ところで、もし天使が質料から抽象された単純な形相であるなら、一つの種にある複数の天使を思い描くことさえ不可能である。なぜなら、どれほど質料的で最下位のものであっても形相であれば何であれ、もしそれがあること [esse] に即してか知性に即してか抽象されたものとして措定されるとするなら、一つの種において一つの形相としてのみ残存するからである。例えば、すべての基体を欠いて自存する白さが知解されると、複数の白さを措定することは不可能であることになる。というのも、このないしあの基体においてあるということを通じてのみこの白さはあの白さと異なるということわれわれは見るからである。また同様に、もし人間性が抽象されたものとしてあった

とするなら、それはたった一つのものでしかないことになってしまったらう³⁰。それに対して、もし天使が質料と形相から複合された実体であるとするなら、相異なる天使の質料が何らかの仕方で区別されていると言うのが必然である。ところで、質料と質料との区別は二通りしか見出されない。一つは質料の固有の論理に即したものであり、すなわち相異なる現実態との関わりに即したものである。というのも、固有の論理に即して質料は可能態においてある一方で³¹、可能態は現実態に対して言われるのだから³²、諸々の現実態の秩序に即して諸々の可能態および質料における区別が認められるのが必然だからである。そしてこのような仕方、より下位の諸物体の質料——それはあること [esse] に対する可能態である——は諸天体の質料——それはどこ [ubi] に対する可能態である——とは異なる。他方で、質料の第二の区別は量の分割に即したものであり、それは、この諸次元の下に存在する質料が他の諸次元の下にある質料と区別される限りでのことである。そしてまず質料の第一の区別 [すなわち現実態との関わりに即した区別] は類に即した相異性をもたらす。なぜなら、哲学者 [アリストテレス] の『形而上学』第5巻に即せば質料に即して相異なるものは類という点で異なるからである³³。他方で、質料の第二の区別 [すなわち量の分割に即した区別] は同じ種における諸々の個体の相異性をもたらす。ところで、質料のこの第二の区別は相異なる天使においてはありえない。というのも、天使たちは非物体的であり量的な諸次元を全くもって欠いているからである。それゆえ、もし質料と形相から複合された複数の天使がいるとするなら、その天使たちにおいては第一の仕方に即した諸々の質料の区別があることになるということが残され、そのようなわけで、その天使たちは種だけではなくて類という点でも異なるということが帰結する³⁴。

第二の論理は宇宙の秩序に基づいて解される。その理由は次の通りである。宇宙の善が二通りあることは明白である。つまりは、或る分離された善——すなわち、軍隊における指揮官であるような神——と、諸事物そのものにおける或る善のことであり、後者は、軍隊の諸部分の秩序が軍隊の善であるように、宇宙の諸部分の秩序のことである³⁵。それゆえ、使徒 [パウロ] は『ローマの信徒への手紙』第13章で「神からのものどもは秩序づけられている」と言う³⁶。さて、宇宙のより上位の諸部分は宇宙の善——それは秩序である——をより多く分有していなければならない。ところで、それらにおいて秩序が自体的にあるものどもの方が、それらにおいて秩序がたんに附帯的にのみあるものどもよりも完全な仕方、秩序を分有する。さて、一つの種にあるすべての個体において秩序は附帯的にしかないということは明白である。というのも、その諸々の個体は、種の本性的には合致し個体化をもたらす諸原理および相異なる附帯性——それらは種の本性と附帯的に関わる——に即しては異なるからである。他方で、種という点で異なるものどもは本質的な諸原理に即して自体的に秩序を持つ。というのも、[アリストテレス] 『形而上学』第8巻³⁷で言われるように、諸事物の種においては、諸々の数の種においてと同様に、一方の種が他方の種に対して余剰があることが見出されるからである³⁸。ところで、より下位のものども——それらは生成消滅しうるものであり宇宙の最下位の部分であって、秩序をより少なく分有する——においては、相異なるものすべてが自体的に秩序を持つということが見出されるわけではなくて、一つの種にある諸々の個体と同様に、或るものどもは附帯的にのみ秩序を持つ。他方で、宇宙のより上位の

部分、すなわち諸天体においては、附帶的ではなくて自体的にのみ秩序が見出される。というのも、すべての天体は互いに種という点で異なるのであり、天体においては、一つの種に複数の個体があるのではなくて、たった一つの太陽やたった一つの月があるのであって、他のものどもについてもそうだからである。したがって、ましてなおさら宇宙の最上位の部分においては、附帶的にであって自体的にはなしに秩序づけられた何らかのものどもは見出されない。かくして、すべての天使は、神——それは純粹現実態であり無限の完全性にある——とのより多くないしより少ない近接性に基づいて、諸々の単純な形相のより多いおよびより少ない完全性に即して、互いに種という点で異なるということが残される。

それに対して、第三の論理は天使の本性の完全性に基づいて解される。その理由は次の通りである。各々のものは、自身に属するものどもの内の何も自身には欠けていない時に完全だと言われる³⁹。そしてたしかにこうした完全性の段階は諸事物の極限に基づいて判定される。すなわち、完全性の最上位にある神には、あること〔esse〕全体の論理に属するものどもの内の何も欠けていない。というのも、ディオニシウスが言うように、神は自分の内に諸事物の完全性すべてを端的かつ卓越した仕方ですべて持つからである⁴⁰。他方で、諸事物の最下位の部分——それは生成消滅しうるものを含む——における何らかの個体は、自分の個体化の論理に即して自分に属するものを何であれ持つということに基づいては完全なものとして見出される一方で、自分の種の本性に属するものを何であれ持つわけではない。というのも、自分の種の本性が他の諸々の個体においても見出されるからである。こうしたことが不完全性に属するのが明白に窺えるのは、生成しうる動物たち——それらにおいて一方のものは共生のために自分の種の他方のものを必要とする——においてだけではなくて、いかなる仕方であれ種子から生成したすべての動物——それらにおいてオスは生成するために自分の種のメスを必要とする——においても、はてはすべての生成消滅しうるもの——それらにおいては、自らの可滅性のゆえに一つの個体においては永続的に保存されえない種の本性が複数のものにおいて保存されるということのために、一つの種の諸々の個体の多数性が必要である——においてもそうである。他方で、宇宙のより上位の部分においては完全性のより高位の段階が見出される。そこにあるものどもにおいては、太陽のような一つの個体が、固有の種に属するものどもの内の何もそれに欠けていないというようにして完全である。それゆえ、種の質料全体も一つの個体の下に包含される。そして他の諸天体についても同様である。したがって、ましてなおさら被造的諸事物の最上位の部分——それは神に最も近接的である——、すなわち天使たちにおいては、種全体に属するものどもの内の何も一つの個体に欠けていないような完全性が見出されるのであるからして、一つの種において複数の個体があるということにはならないだろう。それに対して、完全性の最高位にある神は、種においてだけではなくて類においても他の一義的な述語においても、他のいかなるものとも合致しない⁴¹。

【異論解答】

それゆえ、

一、第一に対しては以下のことが言われるべきである。アウグスティヌスが『エンキ

リディオン』で天使および人間の本性について語っているのは⁴²、それらが本性的なあること [esse naturale] において考察されることに即してではなくて至福に対して秩序づけられることに即してである。というのも、その場合には、何らかのものどもは天使および人間の本性において消失してしまったからである。ところで、至福の秩序に関して人間の本性は天使の本性全体と区分される。なぜなら、天使の本性全体は、至福に到達するように、あるいは至福から回復不能なほどに背くように本性づけられているのが一つの仕方によって、すなわち最初の選択に際して直ちにとという仕方であるのに対して、人間の本性は時間の経過を通じてだからである。そしてそれゆえ、『エンキリディオン』でアウグスティヌスは、天使たちは本性の種に即して異なってはいるものの、至福に対する秩序の一つの仕方のゆえに、一つの本性についてであるかのようにすべての天使について語っている⁴³。

二. 第二に対しては以下のことが言われるべきである。種の差異ないし合致について探求される際には、諸事物に関する考察は諸事物の本性に即しており、こうしたことに即しては、神に最も近接的な一つの本性についてであるかのようにすべての天使について語られるべきではなくて、ただ第一の天使だけが神に最も近接的な本性であったのは、その本性においてはたしかに、種に即しても数に即しても相異性がないがゆえに最小限の相異性しかないということに即してである。

三. 第三に対しては以下のことが言われるべきである。あること [esse] そのものは、諸々の単純な本性だけではなくて複合された本性に対しても現実態として関わる。それゆえ、種は何であるか [quid est] に対して述定される一方で、あることはあるか否か [an est] の問いに属すると思われるがゆえに、諸々の複合された本性において種はあることそのものではなくて形相から解されるのと同様に、天使の諸実体においても、それゆえ、あることそのものに即してではなくて諸々の自存する単純な形相——それらの差異は、既述のように完全性の秩序に即している⁴⁴——に即して種が解される。

四. 第四に対しては以下のことが言われるべきである。形相——それは基体ないし質料においてある——がこのものにおいてあるということを通じて個体化されるのと同様に、分離された形相は [自らとは別の] 何らかのものにおいてないことが本性づけられている⁴⁵ということを通じて個体化される。というのも、このものにおいてあること [esse in hoc] がそうであるのと同様に、[自らとは別の] 何らかのものにおいてありえないこと [non posse esse in aliquo] も普遍——それは多数のものについて述定される——の共通性を除外するからである。したがって、この白さが、白さであるということ——それは種の論理に属する——に基づいてではなくて、このものにおいてあるということ——それは個体の論理に属する——に基づいて多数の個体を自らの下に持つことを妨げられるのと同様に、この天使の本性は、諸事物のしかじかの秩序における本性であるということ——それは種の論理に属する——に基づいてではなくて、[自らとは別の] 何らかの基体において受容されないことが本性づけられている⁴⁶ということ——それは個体の論理に属する——に基づいて多数のものにおいてあることが妨げられる。

五. 第五に対しては以下のことが言われるべきである。感受 [affectio] は認識に後続するのだから、認識がより普遍的であればあるほど、それだけ一層その認識に後続する感受は共通善に関与し、また認識がより個別的であればあるほど、それだけ一層その認

識に後続する感情は欠如的な善〔*bonum privatum*〕⁴⁷に關与する。それゆえ、われわれにおいても、欠如的な愛好は感覺認識から生起するのに対して、共通で絶対的な善の愛好は知性認識から生起する。したがって、ディオニシウスが『天使位階論』第12章で言うように、天使たちはより高位のものであればあるほど、それだけ一層それらは普遍的な知を持つただから⁴⁸、それゆえ、天使たちの愛好は最大限に共通善に關与する。したがって、もし、種において合致していたとする——それは一つの種の欠如的な善に属することになってしまったらう——よりも、種という点で異なる——それの方が、示されたように宇宙の完全性によりよく属する⁴⁹——なら、天使たちはよりよく互いを愛好する。

六、第六に対しては以下のことが言われるべきである。身体と合一されたわれわれの魂は分離された諸実体のことを、その諸実体についてそれらが何であるかを知るというように、その諸実体の本質に即して知解することができない。なぜなら、その諸実体の本質は諸々の可感的本性——それらからわれわれの知性は認識を捉える——の類およびその諸々の可感的本性とのつり合いを超出しているからである。そしてそれゆえ、分離された諸実体が定義されるのは、われわれの側から固有な仕方ではなくて、排除を通じてかその諸実体の何らかの作用を通じてかのみである。そしてこのような仕方でもスケヌスは、最も種的な種〔*species specialissima*〕ではなくて、下位の類〔*genus subalternum*〕——それは類および種のことであり、それから天使は定義される——に属する定義によって天使を定義している⁵⁰。

七、第七に対しては以下のことが言われるべきである。神の諸々のペルソナの区別の仕方は本質の相異性を欠いており、そうしたことを被造的本性は被らない。そしてそれゆえ、こうしたこと〔すなわち、一つの本質の下に複数のペルソナがあるということ〕が諸々の被造物において帰結するということが引き出されるべきではない。

八、第八に対しては以下のことが言われるべきである。より多いということとより少ないということは二通りに受け取られる。一方の仕方では、例えばより多く白いものがより少なく白いものよりも明るいと言われるように、同一の形相の分有の相異なる仕方に即しているのであるからして、より多いということとより少ないということは種を相異化しない。他方の仕方では、例えば白いものが赤いものないし緑のものよりも明るいと言われるように、相異なる形相の段階に即してより多いということとより少ないということが言われるのであるからして、より多いということとより少ないということは種を相異化する。そしてこのような仕方でも天使たちは、諸々の本性的な靈的賜物においてより多いということとより少ないということに即して異なる。

九、第九に対しては以下のことが言われるべきである。規定されたものが未規定のものよりもそうであるように、種において構成するものは類において構成するものよりも高貴である。その理由は次の通りである。規定されたものが未規定のものと同様なのは、現実態が可能態に対するようにしてであって、種において構成するものは常により高貴な本性に属するというようにしてではない。それは非理性的な動物たちの種において明らか通りである。というのも、このような種が構成されるのは、感覺的本性——それは非理性的な動物たちにおいて最も高貴なものである——に対する他のより高貴な本性の付加を通じてではなくて、そうした本性における相異なる段階に対する規定を通じ

てだからである。[以上がその理由である。]そして知性的本性——それは天使たちにおいて共通なものである——についても同様に言われるべきである。

十. 第十に対しては以下のことが言われるべきである。類のより不完全な差異が複数の種に多数化されるということは普遍的に真ではないと思われる。その理由は次の通りである。物体は魂化されているということと魂化されていないということを通じて分割される。しかしながら、特にもし諸天体が魂化されていてすべての星が互いに種という点で異なるとするなら、魂化されていない諸物体よりも魂化された諸物体の方により複数の種があると思われる。しかるに、植物および動物たちにおいては諸々の種の最大限の相異性がある。[それゆえ、類のより完全な差異の方が複数の種に多数化されている。]しかしながら、こうした事柄の真理が探究されるためには、ディオニシウスがプラトン主義者たちとは反対の見解を提示していると思われる⁵¹ということが考察されるべきである。すなわち、プラトン主義者たちは、諸実体は一つの第一のものに近接的であったのであればあるほど、それだけそれらはより少ない数にあると言う⁵²。それに対して、ディオニシウスは『天使位階論』第14章で、天使たちはすべての質料的な多数性を超越すると言う⁵³。ところで、物的な諸事物——それらにおいては何らかの物体がより上位のものとして見出されるのであればあるほど、それだけ一層その物体は質料をより少なく持っているが、しかし、より多い量に延長している——に基づいて両者が真であることに誰かが気づくことができる。それゆえ、プラトン主義者たちの慣習によってわれわれが語るように⁵⁴、数は或る仕方では、[すなわち] — [unitas] が点を、点が線を構成するということに即しては連続量の原因であるのだから、そのようにして諸事物の世界全体 [tota rerum universitas] においても、何らかのものどもが諸々の有においてより上位のものであればあるほど、それだけ一層それらは形相的な多数性——それは諸々の種の区別に即して認められる——をより多く持つ——そしてこうしたことにおいてディオニシウスの言明が保持される⁵⁵——一方で、質料的な多数性——それは同じ種における諸々の個体の区別に即して認められる——をより少なく持つ——そうしたことにおいてプラトン主義者たちの言明が保持される⁵⁶——。ところで、非理性的な動物たちの種は多数存在するのに理性的な動物 [である人間] の種がたった一つであるのは、その最上位における物的本性が霊的諸実体のその最下位における本性に達する⁵⁷ということに基づいて理性的な動物は構成されるということに由来する。他方で、何らかの本性の最上位の段階ないし最下位の段階もたった一つである。無論、もし誰かが諸天体を魂化されたものとして措定したとするなら、理性的な動物たちの種が複数であると言われうることになってしまうだろう。

十一. 第十一に対しては以下のことが言われるべきである。人間たちは、宇宙の最下位の部分——それにおいては自体的のみならず附帯的にも何らかのものが秩序づけられているのが見出される——である諸々の可滅的な被造物の中に含まれる。そしてそれゆえ、戦う教会において権能と秩序に即した相異性は種を相異化しない。ところで、既述のように宇宙の最上位の部分である⁵⁸天使たちにおいてはそうではない。他方で、人間たちにおいて天使たちとの類似は完全なものではなくて、既述のようなものとしてありうる⁵⁹。

十二. 第十二に対しては以下のことが言われるべきである。既述のように、土と水の

諸々の飾りは、可滅的であるがゆえに、同じ種における多数性を要求する⁶⁰。他方で、既述のように、諸天体さえも相異なる種にある⁶¹。その理由は次の通りである。光は、自体的に可感的な質である——そうしたことはいかなる実体形相についても言われえない——がゆえに、諸天体の実体形相ではない。さらに、光はすべてのものにおいて同じ論理にあるのでもない。そのことは、相異なるより上位の物体の諸々の光線〔radius〕が相異なる結果を持つということを通じて明らかである。

十三. 第十三に対しては以下のことが言われるべきである。既述のように、天使たちにおいて個体化があるのは質料を通じてではなくて、天使たちが自体的に自存する形相——それは基体ないし質料においてないことが本性づけられている——である⁶²ということを通じてである。

十四. 第十四に対しては以下のことが言われるべきである。古代の哲学者たちは、認識するものは認識される事物の本性にあるべきだと措定した。それゆえ、エンペドクレスは「われわれは土を土によって、水を水によって認識する」と言った⁶³。しかし、こうしたことを除外するためにアリストテレスは次のことを措定した。瞳が色によってそうであるように、われわれにおける可能態にある限りでの認識力は認識されるものの本性によって纏われないでいる⁶⁴。しかし、それにもかかわらず、可感的形象によって形相づけられることを通じて現実態における感覚が生じる限りでは、現実態における感覚は現実態において感覚されるものである⁶⁵。そして同じ論理で、可知的形象を通じて形相づけられる限りで現実態における知性は現実態において知解されるものである⁶⁶。アリストテレスが言うように、「というのも、魂においてあるのは石ではなくて石の形象だからである」⁶⁷。ところで、何らかのものは、それが質料から分離されているということに基づいて可知的である。そしてそれゆえ、アリストテレスは「質料なしのものであるものどもにおいて知解するものと知解されるものは同じである」と言う⁶⁸。それゆえ、知解する天使が知解される天使と——もしそれらが非質料的であるなら——実体において同じであるのではなくて、一方の天使の知性が他方の天使の類似を通じて形相づけられるのでなければならない。

十五. 第十五に対しては以下のことが言われるべきである。連続的なものの分割に基づいて原因される数は量の種であり、それはただ質料的諸実体においてあるのみである。しかるに、非質料的諸実体においては、一および多が有を分割するというに即して、超越的なものどもにある多数性がある。そしてこうした多数性は形相的な区別を随伴する。

十六. 第十六に対しては以下のことが言われるべきである。原因と原因されるものに即した差異が分離された諸実体を多数化すると或る人々によって措定されるのは⁶⁹、こうしたことを通じて、原因されるものが〔自分の〕原因よりも下位にある限りで、その諸実体における相異なる段階が由来すると彼らが措定する限りでのことである。それゆえ、もし非質料的諸実体における相異なる段階を神の原因する知恵の秩序に基づいてわれわれが措定するなら、その諸実体の内の一方が他方の実体の原因ではなくても、区別の同じ論理が残存することになる。

十七. 第十七に対しては以下のことが言われるべきである。任意の被造の本性は、有限であるがゆえに、諸々の本性の多数性のようには神の善性を完全に再現しない。なぜ

なら、多数の本性において多数の仕方に含まれるものは神において一なる仕方では把握されるからである。そしてそれゆえ、宇宙において、また天使の諸実体においても複数の本性があるのでなければならなかった。

十八. 第十八に対しては以下のことが言われるべきである。天使の諸々の種を構成する差異の対立は完全なものとは不完全なもの、および超出するものと超出されるものに即して受け取られる。それは諸々の数においても同様であり、また魂化されたものと魂化されていないものや他のこのようなものが関わるのと同様でもある。

【註】

¹ 平行箇所：『有と本質について』第5章；『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項および第5項；『対異教徒大全』第2巻第93章および第95章；『神学大全』第1部第50問題第4項。

² Cf. エティエンヌ・タンピエ『1277年の禁令』第81条項「知性実体は質料をもたないゆえに、神は同じ種に属する多数の知性実体を造ることはできない」；第96条項「神は、質料なしに一つの種の下で個別者を多数化することはできない」（中世思想原典集成 13, p.656）。

³ Cf. アウグスティヌス『エンキリディオン』第29章「しかし、人間といういまひとつの理性的被造物は、[アダムの] 初めからの罪と罰および彼自身の罪と罰によって、ことごとく滅んだので、その一部が救われて、あの悪魔的破滅によって天使の仲間の減った分を補充することとなったのである」（アウグスティヌス著作集 4, p.228）。

⁴ Cf. アリストテレス『形而上学』第12巻第8章 1074a33-4 「およそ数において多であるものは質料をもっている」（アリストテレス全集 12, p.426）；ダマスコススのヨアンネス『知識の泉』第3部第52章「数というものとは異なったものに関わるものであり、まったく異なるものではないものらは数え上げることにはできない。異なっていることに即して、それらは数え上げられるのである。たとえばペトロとパウロとが一つである限り、数え上げることにはできない。本体を理拠にすれば一つであるので、二つの本性と言うことはできないが、実体〔個体〕に即すれば異なっているので、二つの実体〔個体〕と言われる。こうして、数は異なったものに関わるものであり、それらが互いに異なっているそのあり方に即して、それらのものは数え上げられるのである」（中世思想原典集成 3, p.651）；アルベルトゥス・マグヌス『アリストテレス「形而上学」註解』第1巻第3論考第2章（Col.16.1, p.32, l.32）「区別は数の原因である」；『ディオニュシオス「神名論」註解』第1章（Col.37.1, p.19, ll.36-7）「ダマスケウスが言うように、「差異は数の原因である」」；第13章（p.440, ll.6-9）「差異は数の原因であるとダマスケウスは言う。しかるに、すべてのものにおいては、本質的な差異も附帯的な差異も多数見出される。それゆえ、すべてのものが一つであるわけではない」；同（p.444, ll.17-22）「ダマスケウスが言うように、「差異は数の原因である」。しかるに、神のものどもにおいては何らの差異もない。なぜなら、形相的な差異があったとするなら、その場合には形相的な差異を通じて何らかのものどもが自分の諸々の本質という点で異なるし、あるいは質料的な差異があったとするなら、その場合には質料を通じて何らかのものどもが異なるが、それらの両方ともが神のものどもにおいてはありえないことだからである。それゆえ、神においては何らの数もない」；トマス・アクィナス『「命題集」註解』第1巻第36区分第2問題第2項第2反対異論（SS1, p.841）「さらには、ダマスケウス『正統信仰論』第3巻第8章に即せば、差異は数の原因である」；第3巻第6区分第1問題第1項第1小問題解答（SS3, p.225）「両者が自体的に自存する二つのものは、数えられることに即して異なっている。というのも、差異は数の原因だからである」；『ポエティウス「三位一体論」註解』第4問題第1項第1反対異論「ダマスケウスは、分割は数の原因であると言っている。しかるに、分割は別異性ないし他者性に基いている。それゆえ、別異性ないし他者性が複数性の原理である」（長倉, p.305）；『対異教徒大全』第2巻第83章「数にそくした差異は質料的原理による」（川添, p.331）；第93章（p.563a, ll.13-6）「形相に由来する差異は種の相異性を導入する一方で、質料に由来する差異は数に即した差異性を導入する」；『定期討論集 神の能力について』第9問題第6項第2反対異論（QD2, p.239b）「区別は数の原因である」；『神学大全』第1部第66問題第6項第3異論解答「種的な相違は形相に起因するものであるし、数的な相違は然し質料に起因するものな

のである」(神学大全4, p.355) ; 第85問題第7項第3異論解答「質料のさまざまな構成に由来するのでしかないごとき形相の相違は種的な差異を生ぜしめるものではなく、それは単に数的な差異を生ぜしめるにすぎない」(神学大全6, p.320) ; 『第4任意討論集』第3問題第2項第3異論 (L.25.2, p.325, ll.18-9) 「ダマスケヌスが言うように、「差異は数の原因である」 ; 第2-1部第91問題第5項本文「数は区別にもとづいて生ずるものである。しかるに、事物が区別されるのに二通りの仕方が見出される。その一つは、馬と牛のように、種的にまったく異なったものが区別される場合であり、もう一つは少年と成年男子のように、同一の種において完成されたものと未完成なるものとが区別される場合である」(神学大全13, p.28) ; 『定期討論集 枢要徳について』第1項第1異論 (QD2, p.813a) 「互いに区別されないものどもは、互いに数え上げられるべきではない。なぜなら、ダマスケヌスが言うように、区別は数の原因だからである」 ; 『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第10講「種としては一で数の上では多であるようなものはすべて、質料をもっている [引用者による中略]。というのも、概念と形相に関してはどんなものも区別されないのであって、つまり、すべての個体は、たとえば人間の場合のように、共通の可知的構造、すなわち概念をもっているからである。それゆえ、すべての個体は、その質料によって区別されるということが結論される。こうして、ソクラテスは、人間として、単に概念によってばかりでなく、数的にもまた一つなのである」(中世思想原典集成14, p.455)。

⁵ トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第1項本文「したがって、第一の有の後にあるものはすべて、自らのあること [suum esse] ではないのだから、何らかのもの——それを通じてあることそのものが縮減される——において受容されたあることを持つのであるからして、任意の被造的なものにおいては、あることを分有する事物の本性と分有されたあることそのものは別である。そして任意の事物はあることを持つ限りで類同化を通じて第一の現実態を分有するのだから、各々のものにおいて分有されたあることは、現実態が可能態に対するように、あることを分有する本性と対照されるのが必然である。したがって、物体的諸事物の本性において質料は、自分を通じてではなくて形相を通じてあることそのものを分有する : というのも、質料に到来する形相は、身体に到来する魂のように、質料を現実態にあらしめるからである。それゆえ、複合された諸事物においては二通りの現実態と二通りの可能態を考察することができる。すなわち、まず第一に質料は形相から見れば可能態としてあり、形相は質料の現実態である。またさらに、質料と形相から構成された本性は、あることそのものを受け入れるものである限りであることそのものから見れば可能態としてある。したがって、質料の基盤が排除されても、もし規定された本性の自体的に自存する何らかの形相が、質料においてではなしに残存するとするなら、その形相はやはり、可能態が現実態に対するように、自らのあることと対照されることになる。ちなみに私が言っているのは「現実態から分離されうる可能態として」ということではなくて、自らの現実態が常に付随するような可能態のことである。そしてこのような仕方では霊的実体の本性——それは質料と形相から複合されていない——は、自らのあることから見れば可能態としてあるのであるからして、霊的実体においては可能態と現実態の複合があり、その帰結として、無論のこともしすべての可能態が質料と名づけられすべての現実態が形相と名づけられるとするなら、形相と質料の複合がある。しかし、無論のこと、こうしたことは諸々の名称の共通な使用に即して固有に言われてはいない」(石田2014a, p.48 (ただし、引用の際には訳を改めた))。

⁶ Cf. アリストテレス『自然学』第3巻第4章203b30「永遠なものどものうちにあつては、ありうるということはあるということとすこしもかわらない」(アリストテレス全集旧3, p.97) ; トマス・アクィナス『「命題集」註解』第1巻第7区分第2問題第2項第1小問題解答 (SS1, p.184) 「哲学者 [アリストテレス] の『自然学』第3巻第4章に即せば、永続的なものどもにおいては、あることと可能であることは異ならず、神のものどもにおいてはましてなおさらそうである」 ; 『定期討論集 真理について』第23問題第4項第6異論「神は必然的に彼がそれであるところの全てのものである。というのは、哲学者の『自然学』第3巻によれば、「永続するものどもにおいて存在することと存在しうることとの間に何らの相違もないからである」(山本d, p.128) ; 『対異教徒大全』第2巻第91章 (L.13, p.552b, ll.23-4) 「また、「永久なものどもにおいてはあることと可能であることが異ならない」 ; 第4巻第24章 (L.15, p.93b, l.17) 「ところで、「神のものどもにおいてはあることと可能であることは異ならない」 ; 『アリストテレス「自然学」註解』第3巻第4章(第7講)第6節 (L.2, p.122a) 「永続的なものどもにおいてはありうることとあることは異ならない」。

⁷ Cf. 『シラ書 [集会の書]』第13章第15節「生き物はすべて、その同類を愛し、／人間もすべて、自

分に近い者を愛する」(新共同訳)。

⁸ Cf. ボエティウス『区分について』(Magee, p.32, 1.22 - p.34, 1.2)「しかしながら、定義することの規則だけを私は追求することにしよう。実際、諸事物の内、あるものはより上位のものであり、あるものはより下位のものであり、あるものは中間のものである。まず上位の諸事物をいかなる定義も包括しない。なぜなら、その諸事物より上位の諸々の類は見出されえないからである。他方でまた、より下位の諸事物——それらは個体である——は諸々の種差を欠いているのであるからして、その諸事物も定義から隔離されている。したがって、諸々の類を持ち、かつ、諸々の類であれ種であれ個体であれ他のものどもについて述定される中間のものどもが定義の下に入りこむことができる」；ペトルス・ヒスパヌス『論理学綱要』第2巻「客位語について」「種差について」第13節「ボエティウスは、種だけが定義可能であると主張したのである。実際、定義は類と種差からならねばならない。ところが種だけが類と種差からなる。したがって、種だけが定義可能なのである」(山下, p.147)；ペトルス・アベラルドゥス『弁証法』第5論考第2巻「諸事物の実体的な定義について」(De Rijk, p.584, ll.21-3)「したがって、ボエティウスが『区分について』で示すように、諸々の種——それはたんなる類と諸々の実体的な差異を持つ——だけが実体的に定義される」。

⁹ ダマスススのヨアンネス『知識の泉』第3部第17章 (Buytaert, p.69, ll.11-4)「したがって、天使とは、常に可動的で、裁量という点で自由で、非物体的で、「神に奉仕する」、本性によってではなくて恩寵に即して不死性を受け入れる、知性的実体——その実体の種や極〔terminus〕を創造主だけが知っている——である」。

¹⁰ Cf. グレゴリウス一世『福音書講話』第2巻第34講話第14節「確かに、この至高の都においては、各自固有なものを持ってはいるが、それは同時に、すべてのものに共有するものでもある。また、各々のものは、自分が部分的に持っているものを、他の位階の中に全体的に所有している。しかし、彼らが皆、同じ一つの名称で呼ばれることはない。それは、各々の位階が、自分の職務のためにより豊かに受けた賜物の名称を、自分の特有の名称として受けているからである。事実、わたしは前に、セラフィムとは炎を意味すると言ったが、すべての天使も同じく、創造主に対する愛に燃え立っているのである。ケルビムとは、知識の充溢を表しているが、すべての天使も同じく、知識の泉である神そのものを見ているのだから、何も知らないような天使はひとりもないのである。王座も、その上に創造主の座している軍団を意味するのであるが、他の天使たちも、もし創造主が彼らの心を支配されなければ、決して幸福ではあり得ないのである。したがって、すべての天使たちが部分的に持っている賜物を、自分の職務上より多く受けた者は、その賜物の名称を、特に自分の名称として受けたのである。事実、特に主権とか權威とかの名が示すような、独占的に所有されているものも、ここではすべて、各々のものでもある。すべてのものは、他のものを持っているものを、他のものの中に、霊的な愛によって自分でも所有しているからである」(キリスト教古典叢書 16, p.219)。

¹¹ Cf. トマス・アキナス『命題集』註解』第4巻第49区分第5問題第1項第2異論 (P.7.2, p.1233a)「より多いということより少ないということは種を相異化しない」；『対異教徒大全』第4巻第34章 (L.15, p.119b, ll.32-3)「より多いということより少ないということは合一の種を相異化しない」；『神学大全』第1部第50問題第4項第2異論「多と少」は種を多様化するものではない。然るに、天使たちが互いに異なっているのは、「多」と「少」の差——たとえば或る天使は他の天使よりも、より単純であるとかその知性がより鋭いかいったふうな——に基づく以上に出ないと考えられる。天使たちの間には、それゆえ、種の相違は存在しない」(神学大全 4, p.141)；第2-1部第18問題第11項反対異論「多や少は種を区別しない。しかるに、多や少というものは、善性または悪性についてこれを加増するとき周辺条件の一つでしかない」(神学大全 9, p.397)；第60問題第5項第3異論「より大・より小ということ種的な区別が生ぜしめられることはない。ところが、様々の快楽的なことからは、より大・小という観点からだけ区別される。したがって、すべての快楽的なことからは徳の一つの種に属する」(神学大全 11, p.219)；第3異論解答「より大・より小ということとは、そのことが理性への異なった関係によるのでなければ、種的差異を生ぜしめるものではない」(p.224)；第72問題第8項第1異論「過剰と欠陥はより大、より小という仕方では異なる。しかるに、より大、より小ということとは種を多様化するものではない。それゆえに、過剰と欠陥は諸々の罪の種を多様化するものではない」(神学大全 12, p.50)；第1異論解答「より大、およびより小ということとは、種の多様性の原因ではないが、時として異なった形相から出てくるものである限りにおいて、異なった種の帰結ではあるのであって、たとえば火

は空気よりも軽い、と言われる場合がそれにあたる。ここからして、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第八巻において、諸々の友愛はより大、およびより小ということにもとづいて語られているがゆえに、友愛には種の多様性はないと主張した人々は「不十分な徴しに信を置いてしまった」とのべている。このような次第で、理性を超え出るか、あるいは理性を欠落するということは、それらが異なった動因から帰結するものであるかぎりにおいて、種的に異なったものである罪に属するのである」(p.52)。

¹² 同様の議論は次の箇所にもある：『神学大全』第1部第50問題第4項第1異論「種差は類よりも高貴なものなるがゆえに、およそ、各自における最も高貴なるものに関して一致するところのものは、いずれも種構成的な最終の種差において一致するわけであり、従って種を同じくする。然るに、すべての天使は、彼らにおいて見いだされる最も高貴なるもの、つまり知性的たることにおいて一致している。それゆえ、すべての天使は同一の種に属しているのではなくてはならぬ」(神学大全4, p.141)。

¹³ Cf. ボニファティウス2世『書簡2』(PL65, 43B-44A)。

¹⁴ Cf. トマス・アクィナス『神学大全』第1部第66問題第3項主文「浄火天の指定が見出されるのは、ストラブスならびにベダの典拠、そしてさらにはバシリウスの典拠以外にはない。その指定にあたって彼らは、一つの点に関するかぎり、つまり、それが至福者たちの場所であるという点に関するかぎり一致している。すなわち、ストラブスも、そしてベダも、ともに、『それは造られるやいなや、ただちに天使たちによって満たされた。』と説いている。またバシリウスは、『ヘクサエメロン教話』第二においていうのである。『断罪された者たちが至極の闇のなかへ追いやられるごとく、同様にまた、優れた業に対する報いは、この世の外なる、かの光のうちにおいて実現される。至福者たちはそこにあつて休らいの住まいを与えられるのである。』と——。とはいえ、これを指定する所以にいたっては彼らの間に相違が存している。すなわち、ストラブスやベダが浄火天を指定するのは、蒼穹——彼らはこれを星辰天と解する——が造られたのは、始めにではなくして、二日目においてであったとされているからであった。バシリウスの場合は、これに対して、その指定のいわれは、神がその業を端的に闇を以て開始したと見られるのを防ごうとするにある。この点が、すなわち、マニ教徒たちの誹謗的であり、彼らが旧約の神を呼んで闇の神となす所以だったからである。／こうした論は、然しながら、たいして強力なものとはいえない」(神学大全5, pp.36-7)。

浄火天の存在に関しては、12世紀であればアレクサンデル3世、サン・ヴィクトルのフーゴー、ペトルス・ロンバルドゥス、13世紀であればトマス・アクィナス、オーベルニュのギヨーム、ハレのアレクサンデル、アルベルトゥス・マグヌス、ボナヴェントゥラらにおいて認められている。詳しくはLitt (pp.255-61)を見よ。なお、トマスが浄火天について論じている箇所をLittは19箇所列挙しているが、それ以外にも同様の箇所は複数見出せるとレオ版編者であるCosは言う(L.24.2, pp.78-9, adn. ad l.112)。ただし、浄化天が天使たちによって「飾られている」という表現は他の箇所では全く見出されないとCosが言うのに対して、GuldentopsとSteel (G&S, p.197)は「宇宙ないし諸天を「飾られたもの」として特徴化することは古典文学およびキリスト教文学において古典的なトポスである」と言う。その上で、キケロ『トゥスクルム荘対談集』第1巻第28章第68節、アウグスティヌス『神の国について』第9巻第23章、旧約聖書の『ヨブ記』第26章第13節、そしてトマス・アクィナス『「ヨブ記」註解』第26章といった典拠を示している。Cf. トマス・アクィナス『「ヨブ記」註解』第26章「「神の霊が天を飾った」、すなわち霊的な賜物の装飾によって天上的な霊を飾った」(保井, p.414)。

¹⁵ 「個体化の原理は質料である」という類の言説は以下の箇所にもある：『対異教徒大全』第1巻第44章；第4巻第63章；『神学大全』第1部第29問題第3項第4異論解答；第54問題第3項第2異論解答；第56問題第1項第2異論解答；第75問題第4項主文；第75問題第5項主文；第76問題第2項第3異論解答；第86問題第3項主文；第3部第6問題第1項第2異論解答；第77問題第2項主文；『アリストテレス「形而上学」註解』第5巻第8講；第7巻第7講；第10巻第4講；第11講など。

¹⁶ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第4章430a2-4「知性それ自身も、諸々の知性認識されうるものと同じように知性認識されうるものである。なぜなら、素材を伴わないもの場合には、知性認識しているものと知性認識されているものとは同一だからである」(アリストテレス全集新7, p.150)；トマス・アクィナス『アリストテレス「魂について」註解』第3巻第3章(L.45.1, p.216, ll.75-80)「ここでアリストテレスは「質料なしのものであるものどもにおいて」、すなわちもし現実態で可知的なものどもをわれわれが受け取るとするなら、現実態において感覚するものと現実態において感覚されるものが同じであるように、「知解するものと知解されるものは同じである」と言う。というのも、「観照的

知」そのもの「とそのように知られうるもの」、すなわち現実態において知られうるものは「同じである」からである」。

¹⁷ Cf. モーゼス・マイモニデス『迷える者たちの導き手』第1巻第73章 (Justinianus, f.37r) ; 第2巻第1章 (f.39r) ; トマス・アキナス『定期討論集 魂について』第3問題第6異論「モーゼス・マイモニデスが言っているように、質料から分離しているものにおいては、それらが多数化されるのは原因と原因されたものに基づいてのみである」(井上 b, pp.194-5)。

¹⁸ Cf. ディオニュシオス・アレオパギテス『天上位階論』第10章第2節「もろもろの位階のそれぞれに対して聖なるものにふさわしいもろもろの秩序が定められたので、万物の超存在的な調和は、理性を有するもの〔人間〕と知性を有するもの〔天使〕に対して、それぞれの聖なる整然たる秩序と秩序正しい上昇とをかくもよく整理したのであり、したがって、われわれはその位階全体が第一の諸力、中間の諸力、最後の諸力に区分されているのを見るのであるが、しかし厳密に言えば、それ〔万物の超存在的な調和〕は、同じ神聖なもろもろの調和によってそれぞれの階級そのものを〔さらに三つに〕分けたのである」(中世思想原典集成 3, pp.391-2)。

¹⁹ Cf. アリストテレス『形而上学』第3巻第3章 999a12-3 「不可分なものども〔個物〕においては、その或るものが他のものよりも先であるとか後であるとかいう区別は存しない〔したがって個物には類が別に存在するであろう〕」(アリストテレス全集旧 12, p.74) ; トマス・アキナス『アリストテレス「形而上学」註解』第3巻第8講 (EM, p.122, n.438) 「一つの種の諸々の個体の間では、一方のものが第一のもので他方のものがより後のものであるのは本性に即してではなくて、ただ時間という点においてのみであるということは明白である」。

²⁰ 同様の議論は次の箇所にもある：『神学大全』第1部第50問題第4項反対異論「『形而上学』第三巻にいうところでは、一つの種に属するもの間においては「先・後」の関係は見いだされえない。しかるに、天使たちの間にあっては、一つの階層に属する天使たちの間ですら、「前なる者たち」と「中なる者たち」と「後なる者たち」の別が存するものなること、ディオニシウスが『天使階序論』第十章に説くごとくである。してみれば、諸々の天使が一つの同じ種に属するということはありえない」(神学大全 4, p.142)。

²¹ 同様の議論は次の箇所にもある：『命題集』註解』第2巻第3区分第1問題第4項第1反対異論 (SS2, p.96) 「一つの種の諸々の個体の多数化は、一つのものにおいては救われえない種の永続性を保存するためにのみある。それゆえ、不可滅的な諸物体においては、太陽や月のように、一つの種に一つの個体しかない。しかるに、天使は不可滅的な実体である。それゆえ、一つの種に複数の天使があるのではない」；『対異教徒大全』第2巻第93章 (L.13, p.563a, l.20 - p.563b, l.14) 「一つの個体においては永続的に保存されえない種の本性が、複数の個体において保存されるということのために、可滅的な諸事物においては一つの種に複数の個体がある。それゆえ、不可滅的な諸物体においても、一つの種には一つの個体しかない。ところで、分離された実体の本性は一つの個体において保存されうる。というのも、上で示されたように、分離された諸実体は不可滅的だからである。したがって、そうした諸実体においては同じ種に複数の個体があるのではなくてもよい」。

²² Cf. アウグスティヌス『告白』第12巻第7章第7節「あなたは存在しており、その他は何も存在していなかった。あなたが天と地を創造されたのは無からでした。この二つのものは、一つはあなたに近く、他方は無に近く、その一方を超えたところにあなたが在り、もう一つの下の方には、無が在ります」(アウグスティヌス著作集 5.2, pp.278-9)。

²³ 同様の議論は次の箇所にもある：『対異教徒大全』第2巻第93章 (L.13, p.563a, ll.12-9) 「種という点では同じである一方で数という点では異なるものは何であれ、質料を持つ。というのも、形相に由来する差異は種の相異性を導入する一方で、質料に由来する差異は数に即した相異性を導入するからである。ところで、分離された諸実体は、その諸実体の部分であるような質料も、〔自らが〕形相として合えられるような質料も全くもって持たない。したがって、一つの種に複数の天使があるということは不可能である」。

²⁴ Cf. トマス・アキナス『命題集』註解』第2巻第3区分第1問題第4項主文 (SS2, p.97) 「私は解答する。以下のことが言われるべきである。このことをめぐっては三つの意見がある。すなわち、或る人々は、すべての天使は一つの種にあり、そこからまた天使と魂は種という点で異ならないと言った。それに対して、他の人々は、天使と魂は種という点で異なっており、また一方の秩序の天使たちは他方

の秩序の天使たちとは異なっているが、一つの秩序にある天使はすべて一つの種にあると言う。それに対して、他の人々は、いかなる天使も他の天使とともに一つの種にはないと言う。そしてこの[第三の]意見が哲学者たちやディオニュシウス——彼は『天上位階論』第10章で、同じ秩序においては第一の天使たち、中間の天使たち、最後の天使たちがいると措定する——の諸々の言明と調和している；『神学大全』第1部第50問題第4項主文「一部のひとびとは、あらゆる霊的実体——魂の場合をも含めて——が一つの種に属するとした。また他の一部のひとびとは、すべての天使は一つの種に属しており、ただ魂の場合には然らざる旨を説いた。さらに他の一部のひとびとは、すべての天使が一つのヒエラルキアに属するとし、乃至はその一つの階層に属するとさえなしたのである」(神学大全4, p.142)。

²⁵ Cf. オリゲネス『諸原理について』第1巻第8章第2節「我々は天上の者に関しても、人々の魂に関しても、霊的な者どものうちに、相異なる本性を持っているものがあり、したがってそれらが相異なる創造主たちによって作られたと言っている人々のばかげた不敬な作り話に同調しないであろう。この人々は、相異なる本性を持っている理性的造物物を、唯一の同じ創造主が作ったとみなすことを、条理を逸した考えとする。そして、それは確かに条理を逸した考えである。しかしこの人々は、諸造物物の間に見られる相違の原因を知らないのである。彼らは、功績という理由が全くない所で、唯一の同じ創造主が、ある者に権勢を課し、他の者を主権者に隷属させ、またある者に支配権を与え、他の者を支配者に服従させることは不条理であると言っている。ところで思うに、これらの主張のすべては、私の上述の説明によって論理的に論駁される。つまり以上の説明によって、造物物の各々にみられる相違と多様性の原因が、神の摂理の不公平さにあるのではなく、それら各々の行動が善徳あるいは悪徳に応じて熱烈あるいは怠慢であるということに由来することが示される」(キリスト教古典叢書9, p.112)；第2巻第9章第5-8節；トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第95章(L.13, p.569b, ll.1-12)「さて、以上を通じて、すべての霊的実体——その間にオリゲネスは諸々の魂も共に数えている——は始めから等しいものとして創造された一方で、このような実体——或るものは物体と合一されており、或るものは合一されておらず、また或るものはより高位のものであるのに対して、或るものはより下位のものである——に見出される相異性は諸々の功績の差異に由来すると言ったオリゲネスの立場が除外される。というのも、諸々の段階のこうした差異は本性的なものであること、そして魂は分離された諸実体と同じ種にはないということ、分離された諸実体そのものも互いに同じ種にはないということ、それらは本性の秩序に即して等しいものでもないことが[既に]示されたからである」。

²⁶ Cf. ボナヴェントゥラ『命題集』註解第2巻第3区分第1部第2項第1問題結論(B.2, p.103b - p.104a)「私は解答する。以下のことが言われるべきである。この点[すなわち、天使たちにおいてはペルソナの上での単なる区別[discretio]しかないのか]については二通りの立場があった。/すなわち、或る人々は、天使たちにおいてペルソナの上での区別はあるが、決して「純粹に」ではなくて、むしろそこでは諸々の個体の数だけ種があると言った。[引用者による中略]しかし、こうしたことは諸物体においては何らかの蓋然性を持つとはいえ、しかしながら、諸々の霊において、いかなる霊も種の本性において他の霊と共通していないということは合理的ではないと思われる。その理由は次の通りである。聖書を通じて知られているように、多数の天使が同じ職務に対して秩序づけられ共通の同じ作用を持つと思われる。ところで、聖書を通じて聖人たちの言明を通じても諸々の職務を通じてもそれほど多くの相異性がわれわれには知られていない。それゆえ、こうしたことを言うのは憶測でしかないと思われる。というのも特に、何らかの論理が[同意することを]強いるものであることが自明であることが窺えないからである。/他方の節度があつてカトリックの立場は次の通りである。天使たちにおいてはペルソナ性に関してのみ、すべての天使においてであれ、何らかの天使たちにおいてであれ区別を措定できる。そしてこうしたことを導入する諸々の論理は、諸々の奉仕の側面からも、神との類同化の側面からも、互いの類同化の側面からも、是認されるべきである」；第9区分第1項第1問題結論(B.2, p.242b - p.243a)「私は解答する。以下のことが言われるべきである。このこと[すなわち、相異なる秩序にある天使たちは相異なる種に本性を通じてあるのか否か]をめぐっては二通りの意見があり、両方とも蓋然的である。/一方の意見は次の通りである。天使たちにおいては「種」に即してと「下位の諸々の類」に即しても「相異性」があり、そのために「位階」がいれば一つの類であり、「三つの秩序」が諸々の種をもたらす。そして天使たちがこのように措定されるよう促されているのは、神の善性の顕示のゆえでも、他の諸々の造物物における類似のゆえでも、天使たちそのものにおいて見つけられた諸々の段階のゆえでもある。というのも、同じ秩序の天使たちは何らかの仕方自分たち[同士]を超出しているのだから」。

ら、相異なる秩序や位階の天使たちは、なおさら自分たち〔同士〕を超出していると思われるし、種および類において相異性を持つとも思われる。／他方の立場は次の通りである。すべての天使は、かの国〔すなわち天国〕での合一のゆえにも、宇宙の完全性のゆえにも、「同じ種」にある、というものである。／さて、以上の立場の両方とも、やはり聖書を通じてわれわれには諸々の作用の相異性が知られていないがゆえに、蓋然性を持つとはいえ、こうした題材を規定することに着手した人々は、ディオニュシウスのように、神的な靈感によって〔天使の〕職務も本性も認識したのだとも思われるし、また彼らは、すべての秩序にあるものすべてはすべてのものにおいて——或る一つのものにおいてはより超出した仕方ではあっても——見つけられるであろうと言う。反対する明白な権威が現れない限りは、すべての人間がそうであるように、すべての天使は同じ種にあるというのがより神学的で蓋然的な立場であると思われる。そして人間たちにおいては、種の一性はやはり損なわれないものの、「諸々の本性的なもの」に関しても、諸々の企図された「職務」ないし尊厳〔*dignitas*〕に関しても、「諸々の恩寵的なもの」に関しても、諸々の段階と秩序があるというようにして〔同じことが〕天使たちにおいては知解されるべきである。それゆえ、こうした側に導入された諸々の論理が是認されるべきである；アルベルトゥス・マグヌス『「命題集」註解』第2巻第9区分第7項主文 (Borgnet 27, p.204b)「解決。以下のことが言われるべきである。第一〔すなわち、天使たちは数という点のみ異なるのか種という点でも異なるのか否か〕と第二のもの〔相異なる秩序および位階においてある天使たちは類ないし種という点で異なるのか否か〕をめぐっては三つの意見がある。すなわち、或る人々は、諸々の第一の論理によって、すべての天使は種という点で異なるということを是認しており、そしてこのことは他のすべての意見よりも私には蓋然的だと思われる。なぜなら、真理においては合理的に〔*rationaliter*〕よく防御すること以外のことはできないからである。或る人々は、同じ秩序にある天使たちは一つの種においてあり、相異なる秩序にある天使たちは相異なる種においてあり、相異なる位階においてある天使たちはさらにもっと異なると言う人々である。第三の人々が言い、また博士たちの中でより共通な意見——博士たちは前に保持された諸々の論理をみだりには受容しないので——は、すべての天使は一つの種においてあるというものである。そして他の諸々の意見を支持することは軽率であるがゆえに、この意見に即してわれわれは諸々の反論に対して言及しながら解答することにしよう；『神学大全』第2部第2論考第8問題主文 (Borgnet 32, p.137b)「解決。以下のことが言われるべきである。こうした題材〔すなわち、天使たちが互いに異なるのは、種という点か、あるいは類という点か、あるいは数という点のみであるか否か〕をめぐっては三通りの意見が形式的にはある。／何らかの人々は、個々の天使は種という点で個々の天使と異なっていると言ったのであり、第一に導入された諸々の論理に合意していた。／他の人々は、一つの秩序にある天使たちは一つの種にあり、相異なる秩序にある天使たちは相異なる種にあるとより蓋然的に言った。その際に彼らは、天の王国の装飾に属している諸々の奉仕や職務の多数性のゆえに、すべてのものを秩序づける神の知恵が一つの共通なもの——それが種である——の下に天使のペルソナを多数化すると言っていた。／第三の人々は、すべての天使は一つの種にあるが、しかしながら、諸々の位階や秩序という点で異なると言った。

²⁷ Cf. ディオニュシウス・アレオパギテス『天上位階論』第10章第1-3節；ハレのアレクサンデル（に帰される）『神学大全』第2巻第1部第2探求第2論考第1問題第6章第1項主文 (ST2, p.153b)「以上に対して天使たちは互いに種という点で異なるということが言われるべきである」；アルベルトゥス・マグヌス『「命題集」註解』第2巻第9区分第7項主文 (Borgnet 27, p.204b)「或る人々は、諸々の第一の論理によって、すべての天使は種という点で異なるということを是認しており、そしてこのことは他のすべての意見よりも私には蓋然的だと思われる。なぜなら、真理においては合理的によく防御すること以外のことはできないからである」；第25区分第5項主文 (p.430b)「天使と魂が、種という点で、あるいは近接的な類という点で同じであるということは私の意見ではなく、また天使たちは種という点で同じであると私は考えてはいない」；学芸学部無名教師『アリストテレス「魂について」講義録』第2巻第2講 (Gauthier, p.161, ll.370-2)「実際、偉大な聖職者たちが言っていたし今でも言っているように、諸々の知性体においてはことによると基体〔*suppositum*〕はないのであって、各々の知性体は他の知性体と種に即して異なっている」。

²⁸ Cf. トマス・アクィナス『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項主文 (SS2, p.97)「それに対して、他の人々は、いかなる天使も他の天使とともに一つの種にないと言う。そしてこの〔第三の〕意見が哲学者たちやディオニシウス——彼は『天上位階論』第10章で、同じ秩序においては第一の天

使たち、中間の天使たち、最後の天使たちがいると措定する——の諸々の言明と調和している。そしてこの意見に合意することが、[天使の] 非質料性のゆえにも、[天使の] 非物体性のゆえにも必然的である；第32区分第2問題第3項主文(SS2, pp.838-9)「私は解答する。以下のことが言われるべきである。魂および天使については二通りの意見がある。すなわち、或る人々は、魂および天使は質料と形相から、あるいは、自らの本質の部分であるような何らか二つのものから複合されたものであると言う。そしてこのことに即しては、諸々の魂および天使の差異が割り当てられるような何らかの仕方がおそらくは見出されるのであるからして、諸々の魂および天使は自分自身に基づいても一つの種において複数のものであることになる。なぜなら、種の一性はそれらにおける形相的原理に基づくことになる一方で、諸々の個体の相異性は質料的原理の相異性に基づき、またこの相異性に基づいては、それらにおいて高貴性の或る段階が認められるのであろうからである。そして、天使たちにおいてもそうであるような仕方では諸々の魂においては差異があると言う教師[ロンバルドゥス]の言葉はこうしたことを称揚していると思われる。しかし、上述のように、別の意見に即せば、魂および天使は単純な本性であり、それらにおいてはあること[esse]とそれであること[quod est]による複合しかないのだから、それゆえ、それらにおいて自分自身に基づいてある差異なら何であれ、それは種の相異性を導入する形相的な差異でなければならぬ。そしてこのことのゆえに、天使たちにおいては諸々の個体の数だけ種があるということが生じている；第4巻第12区分第1問題第1項第3小問題第3異論解答(SS4, p.503, n.49)「『個体の論理には二つのもの、すなわち自分においてであれ他のものにおいてであれ『現実態での有であるということ、自分においては不可分のものとして存在しながら、同じ種においてあるないしありうる他のものどもから分割されているということ』がある。そしてそれゆえ、「個体化の第一の原理は」、それによって任意のしかじかの実体形相ないし附帯形相に対して現実態においてあることが獲得される「質料である」。「そして個体化の副次的な原理は次元である」。なぜなら、次元に基づいて質料は分割されるということを持つからである。それゆえ、次元を欠くものどもにおいては、形相を通じた分割——それは種の相異性をもたらす——以外の分割は不可能である。そしてこのことのゆえに、天使たちにおいては諸々の個体の数だけ種がある。なぜなら、天使たちは自分自身に基づいて自存する形相ないし何性であるがゆえに現実態においてあることと区別を持つからである。そしてそれゆえ、天使たちは自分の個体化に質料も次元も必要としない」；『対異教徒大全』第2巻第93章(L.13, p.563a, ll.1-4)「さて、分離された諸実体について前置きされたことごとに基づけば、複数の分離された実体が一つの種にあるのではないことが示される」；『神学大全』第1部第50問題第4項主文「ふたりの天使が一つの種に属するというごときことは、不可能であるという帰結が導かれる」(神学大全4, p.142)；第76問題第2項第1異論解答「知性的魂は、天使と同じく、それに基づいて自らが存在するとき質料を有しない。それでいてやはり、それは何らかの質料の形相なのであって、こうしたことは天使には適合しないところである。かくして、質料の区分に基づいて、一つの種に属する多数の魂が存在する。多数の天使が一つの種に属するというごときはまったくありえないところなのであるが」(神学大全6, p.48)。

²⁹ トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』第1項主文「この問題[すなわち、被造的な靈的実体は質料と形相から複合されているのか否か]をめぐっては、何らかの人々が反対の仕方で見解を述べている。すなわち、或る人々は、被造的な靈的実体は質料と形相から複合されていると主張するのに対して、或る人々はこうしたことを否定する。それゆえ、この真理を探究するためには、われわれが曖昧に進行することのないように、質料の名称によって何が表示されるのかが考察されるべきである。実際、可能態と現実態は有を分割し、また任意の類は現実態と可能態を通じて分割されるのだから、第一質料として共通に名づけられるのは、すべての種および形相や欠如すらも除いて知解されるものの、しかしながら、諸々の形相も欠如も受け入れる或る可能態として実体の類においてあるものごときであるということとは明白である。それは、アウグスティヌス『告白』第12巻と『創世記』逐語註解』第1巻、および哲学者[アリストテレス]の『形而上学』第7巻を通じて明らかな通りである。／さて、このようにして質料が受け取られるなら——それは質料の固有で共通な受け取り方である——、質料が靈的諸実体においてあることは不可能である。その理由は次の通りである。現実態においてあることもあれば可能態においてあることもある同一のものにおいては、現実態よりも可能態の方が時間という点では先であるが、しかしながら、本性的には現実態の方が可能態よりも先である。ところで、より先であるものはより後のものには依存しないが逆はそうではない。そしてそれゆえ、すべての可能態を欠く何らかの第一の現実態が見出される。しかしながら、実在界[*rerum natura*]においては何らの現実態を通

じても完成されていない可能態は決して見出されず、このことのゆえに第一質料においては常に何らかの形相がある。ところで、自分の内に完全性のすべての十全さを持つ端的に完全な第一の現実態からは、すべてのものにおいて現実態であることが原因されるが、しかし、やはりそれは或る秩序に即している。というのも、いかなる原因された現実態も完全性のすべての十全さを持つわけではなくて、第一の現実態から見ればすべての原因された現実態は不完全であるが、しかしながら、何らかの現実態がより完全であればあるほど、それだけ一層それは神により近接的だからである。ところで、ディオニシウス『天上位階論』第4章を通じて明らかのように、すべての被造物の間では靈的諸実体が神に最大限に接近している。それゆえ、その諸実体が第一の現実態の完全性に最大限に近づいている。というのも、完全なものが不完全なものに対するように、また現実態が可能態に対するように、靈的諸実体は諸々の下位の被造物と対照されるからである。それゆえ、靈的諸実体が自らのあること〔esse suum〕のために第一質料——それはすべての有の中でも最も完璧でないものである——を要求するということが、諸事物の秩序の論理はいかなる仕方によっても保持しない。そうではなくて、靈的諸実体は質料全体とすべての質料的なものを遙かに超えて高められている。／こうしたことは、もし誰かが靈的諸実体に固有な作用を考察するとしても明白に窺える。その理由は次の通りである。すべての靈的実体は知性的である。ところで、各々の事物の可能態とは、その事物の完全性が〔どのようなものであるかが〕見つけられるようなものである。というのは、固有の現実態は固有の可能態を要求するからである。ところで、知性的実体である限りでの任意の知性的実体の完全性は、知性においてある限りでは可知的なものであり、したがって、靈的諸実体においては可知的形相の受け入れに対してつり合いのとれているような可能態を要求しなければならない。ところで、第一質料の可能態はこのような類のものではない。というのは、第一質料は形相を個的なあること〔esse individuelle〕に縮減することで形相を受容するからである。それに対して、可知的形相は知性においてはこのような類の縮減を欠いている。というのも、知性が各々の可知的なものを知解するのは、その可知的なものの形相が知性においてある場合のことだからである。ところで、知性は可知的なものを特に共通で普遍的な本性に即して知解するのであり、その場合に可知的形相は自分の共通性の論理に即して知性においてある。それゆえ、知性的実体が形相を受容するものであるのは、第一質料の論理に基づいてではなくて、むしろ或る相反する論理を通じてである。それゆえ、靈的諸実体においてはそれ自体ですべての種を欠いている第一質料がその諸々の靈的実体の部分であることはありえないということが明白になる」(石田 2014a, pp.45-7 (ただし、引用の際には訳を改めた))。また、天使の非質料性をめぐるトマスの議論に関しては石田 2016d も参照。そこには直前の引用箇所に関する考察も含まれている (pp.32-8)。

³⁰ Cf. トマス・アクィナス『『命題集』註解』第2巻第3区分第1問題第4項主文 (SS2, p.97) 「もし天使たちが非質料的だと指定されるなら、いかなる形相ないし本性も質料の相異性においてでなければ数を多数化しないのだから、何らの質料にも受容されない単純で非質料的な形相はたった一つのものでなければならない。それゆえ、その形相の外にあるものは何であれ、他のものの本性にある。というのも、質料的原理——それはその形相には全くないものである——に即してではなくて、形相に即してその形相は他のものから隔たっているからである。ところで、そのような相異性は種における差異を原因する。それゆえ、任意に受け取られた二体の天使は種に即して異なるのでなければならない」；『神学大全』第1部第50問題第4項主文「『種的に一致し数的に別なもの』は、形相において一致し質料的に区別されているものにほかならない。もし、それゆえ、天使が質料と形相から複合されたものならぬこと、上述のごとくであるとするならば、ふたりの天使が一つの種に属するというごときことは、不可能であるという帰結が導かれる。それはちょうど、いくつもの離在的な白とか、いくつもの人間性なるものが存在する、などといえない (いくつもの白というものが存在するというごときは、白がいくつもの実体において存在するという意味におけるほかにはありえないのであるから) のと同様である」(神学大全 4, pp.142-3)。

³¹ Cf. トマス・アクィナス『『命題集』註解』第1巻第2区分第1問題第1項第3異論解答 (SS1, p.61) 「単純な原理は一性の論理を持つ。そして質料はたんに可能態であるのみであるのだから、それゆえ、それが数という点で一つであるのは、それが持つ一つの形相を通じてではなくて、区別をもたらす形相すべての排除を通じてである。そして同じ論理を通じて、純粹で第一の現実態は一つであり、質料が諸々の形相の到来を通じて多数化されるように多数化されるものではなくて、相異性に対しては全くもって不可能なものとしてある」；『対異教徒大全』第1巻第65章「質料は可能態に於ける有であり、偶有

とは他の中の有である」(酒井, p.273) ; 第 71 章「質料はそれが可能態の中の存在であるが故に、もし此ものの可能態がそれに向つて擴り伸びる所のものが、認識されるのでないならば、完全には認識され得ぬことは、凡て他の諸との可能態に見る如くである」(p.313) ; 第 2 卷第 16 章 (L.13, p.300b, l.17) 「質料は可能態における有である」 ; 第 30 章 (p.338b, ll.45-9) 「質料は、質料がそれであるものに即しては可能態における有である一方で、ありうるものはあらぬこともありうるのだから、質料の秩序に基づいては必然的に、何らかの諸事物は可滅的なものとして存在する」 ; 第 43 章 (p.367a, ll.19-21) 「質料は可能態においてのみあるのに対して、形相は、現実態であるがゆえに、何らかのものとしてある」 ; 第 3 卷第 20 章 (L.14, p.46b, ll.31-7) 「質料は、それ自体に即して考察されるなら可能態における有であるのに対して、形相は質料の現実態であり、それに対して複合された実体は形相を通じて現実態で存在するものであるのだから、まず形相はそれ自体に即して、それに対して複合された実体は現実態で形相を持つ限りにおいて、それに対して質料はそれが形相に対する可能態においてあるということに即して、善である」 ; 『神学大全』第 1 部第 3 問題第 2 項主文「質料は可能態においてあるところのものである」(神学大全 1, p.56) ; 第 8 項主文「質料にいたっては、作動因に対して、數的に同じものではないのみならず、種においても一致するわけではない。前者が可能態にあるのに対して、後者は現実態にあるもの[引用者による中略]である。[引用者による中略] 質料は可能態においてあり、可能態は、然るに、既述よりして明らかなごとく(第一項)、端的には現実態より後なるものでしかない」(p.76) ; 第 7 問題第 3 項第 4 異論解答「『可能態においてある』ということが、質料には適合する」(p.137) ; 第 14 問題第 11 項第 3 異論「個々のものの個々のものたるかぎりにおいての似姿が、神のうちに存在するとは考えられない。というのは、個別性の根源は質料であり、質料は然し単に可能態における有たるにすぎないものゆえ、それはおよそ、純粹現実態たる神には似ても似つかぬものなのだからである」(神学大全 2, p.41) ; 第 76 問題第 7 項第 3 異論解答「如何なる形相といえども、それが現実態として考えられるにおいては、単なる可能態における有でしかない質料から大きい隔たりを持たざるはない」(神学大全 6, p.76) ; 第 2-1 部第 55 問題第 2 項主文「存在への可能性は、可能態における有であるところの質料の側において見出されるが、これにたいして働き・作用への能力は形相の側に見出されるのであって、形相は働き・作用の根源である」(神学大全 11, p.113) など。

³² Cf. トマス・アクィナス『対異教徒大全』第 1 卷第 20 章「可能は現實に對していはれるのであるから、可能に就ては現實のあり方に従つて判断せねばならない判断せねばならない」(酒井, p.92) ; 第 43 章「可能態とは現實體 [ママ——引用者註] に對していはれるものであるから、現實態を、個々の場合に於て出来ないと同様、一般的にも全く、超越することが出来ない」(p.191) ; 『神学大全』第 1 部第 54 問題第 3 項主文「可能態は現実態への關係において語られるものゆえ、現実態のさまざまなるに応じて可能態もまたさまざまたるべきであつて、「固有の現実態が固有の可能態に対応する」といわれるのもこのゆえにほかならない」(神学大全 4, p.198) ; 第 66 問題第 2 項第 4 異論解答「可能態とは現実態への可能態なのであつてみれば、可能態的な有は、それが種々異なつた現実態にまで秩序づけられているということそれ自身に基づいて、種々異なつたものなのであり、例えば、視覚の色におけると、聴覚の音におけるのとごときは即ちそれである」(神学大全 5, p.34) など。

³³ Cf. アリストテレス『形而上学』第 5 卷第 28 章 1024b9-12 「また諸事物が『その類において異なる』[類を異にする]と言われるのは、それら諸事物の第一の[最も近い、直接の]基体が異なつていて、互いに他に解消することもできず、あるいはその両者が同じ基体に解消することもできないようなそれら諸事物についてである」(アリストテレス全集旧 12, p.187) ; 第 8 卷第 2 章 1043a19-21 「差別 [種差] によつての説明方式はそのもの形相またはその現実態を説くものと認められ、そのものに内在する構成要素によつての説明方式は主としてそのものの質料をあげているものと認められる」(p.275) ; 第 3 章 1043b30-2 「定義するところの説明方式は、或るなにかについて他のなにかを言い表わすものであり、そして [この説明方式の要素のうち] その一つ [類] は質料のようなものであり他の一つ [種差] は型式のようなものである」(p.278) ; 第 10 卷第 3 章 1054b27-31 「およそ差別のあるものどもがそのように差別されるのは、それらの類によつてか種によつてかいずれかであるからである、そして、それらが類によつて差別されるのは、それらが共通の質料をもたないものどもであり、互いに他からは生成しないものどもである場合 (たとえば、他の述語形態に属するものどもである場合) にであり、種によつて差別されるのは、それらが同じ類のものどもである場合にである (ここで「類」というのは、差別される両者に共通の実体として、それらの述語となるところのあの同一のものごとである)」

(pp.333-4) ; トマス・アクィナス『アリストテレス「形而上学」註解』第5巻第22講 (EM, p.289, n.1125) 「さて、二つの相異なる基体は、それらの一方が他方に解消されないようなものでなければならない。実際、立体 [solidum] は或る仕方では面 [superficies] に解消される。それゆえ、立体の形と面の形は相異なる類にない。そしてまた、両者は何らか [第三の] 同じものに解消されないものでなければならない。例えば、形象と質料は、もしそれらが自分の本質に即して考察されるとするなら、類という点で相異なる。というのも、何も両者に共通していないからである。また同様に、諸天体とより下位の諸物体は、共通の質料を持たないという限りで、類という点で相異している」；第8巻第2講 (p.407, n.1700) 「定義において一方は他方に対して現実態が質料に対するように対照されるのだから、諸事物を定義する或る人々は質料を通じては充分ではない仕方ではしか定義しない。例えば、家を荒石 [caementum]、諸々の石や木材——それらは家の質料である——を通じて定義する人々がそうである。なぜなら、そのような定義は現実態ではなくて可能態における家を知らせるからである。それに対して、家とは諸々の財と物の格納場所 [cooperatura] であると言う人々は家の質料ではなくて形相のことを言っている。それに対して、両方のものを言う人々は、複合された実体を定義している。そしてそれゆえ、両方からなる定義が完全な論理である。それに対して、諸々の差異から解される論理は、形相に属する。それに対して、内的な諸部分から解される論理は、質料に属する」；第3講 (pp.411-2, n.1721) 「定義される実体は、知性的なものであれ、可感的なものであれ、複合されたものでなければならない。それに対して、第一にそれらに基づいて複合されるようなものどもは、単純であるがゆえに、定義されることはありえない。その理由は次の通りである。上述のように、定義に関する論理は、一方が形相としてあり、他方が質料としてあるものの内の何かを他方に接合する。というのは、上述のように、類は質料から解され、差異は形相から解されるからである。それゆえ、もし、プラトン主義者たちが措定したように諸事物の形象がたんに形相であったとするなら、その形象が定義されることはありえないことになってしまっただろう」；第10巻第4講 (p.478, n.2019) 「まず、それらの内に共通な質料がないものどもは類という点で異なる。というのも、第8巻で上述のように、質料が類ではないとはいえ、しかしながら、事物において質料的であるものから類の論理は解される。例えば、可感的本性は理性から見れば人間において質料的である。そしてそれゆえ、可感的本性において人間と共通していないものは他の類にある。

³⁴ Cf. トマス・アクィナス『命題集』註解』第2巻第3区分第1問題第4項主文 (SS2, pp.97-8) 「こうしたこと [すなわち、任意に受け取られた二体の天使は種に即して異なるということ] は、諸物体としては措定されない限りにおいて、もし天使たちが質料から複合されているとしても必然的にまた帰結する。それは次のようにして明らかである。それらの質料があること [esse] に即して異なると措定されるものなら何であれ、もしそうした質料が、生成消滅しうるものの質料が一つであるように、両方の天使において同じ秩序にあるなら、相異なる形相——それに即して質料は相異なるあることを受け取る——は質料の相異なる部分において受容されるのでなければならない。というのも、質料の或る一つの部分が、対立し離された相異なる形相を同時に受容することはできないからである。しかし、註釈家 [アヴェロエス] が『天球の実体について』第1章および『アリストテレス「自然学」註解』第1巻で言うようにそれを通じて質料が分割される次元量——少なくとも限界づけられた次元量——が質料において予め知解されるのでなければ、質料において相異なる部分を知解することは不可能である。なぜなら、哲学者 [アリストテレス] が『自然学』第1巻で言うように、量が実体から分離されると、実体は不可分のまま残存するからである。しかるに、いかなる形相も、物的形相でなければ、量の下に知解された質料において受容されない。それゆえ、二体の天使が一つの秩序の質料ない可能態において共通することは不可能である。しかるに、諸々の可能態の相異なる段階において受容される形相および本性はすべて、あることに即したより先ということとより後ということに即して受容される。他方で、種の本性は、あることという点でも、あととは観念 [intentio] に即しても、より先ということとより後ということを通じて諸々の個体に共通化されること——ただし、[アリストテレス] 『形而上学』第3巻で言われるように、こうしたことは類の本性においては可能である——は不可能である。それゆえ、二体の天使が、もしそれらが非物的であるなら、一つの種にあるということは不可能である」；『神学大全』第1部第50問題第4項主文 「いまかりに天使が質料を持つとした場合においても、やはり、いくつもの天使が一つの種に属することは不可能であろう。この場合には、すなわち、ひとりの天使を他の天使から区別する根源は質料たるべきであろうが、しかし、こうした質料の区別は量の分割に基づくものではなく (天使は非物的なものなるがゆえに)、その諸能力の多様性に基づくものでなくてはならぬ。だ

が、質料のかくのごとき多様性は、種の多様性の因たるに尽きず、さらにまた類の多様性の因たるのである」(神学大全 4, p.143)。

³⁵ Cf. アリストテレス『形而上学』第 12 卷第 10 章 1075a11-5 「しかし、さらに検討されねばならないのは、善ないし最高善なるものが全体の自然〔実在する世界のすべて〕に対してつぎのどちらの関係にあるか、すなわち、それはなんらか〔世界のすべてから〕離れて独立にそれ自体で存在しているのであろうか、それとも〔世界のすべてに内在する〕秩序なのであろうか、という問題である。あるいはむしろ、これらのどちらでもあるのではなかろうか？ たとえば軍隊においてのように、すなわちそこでは、その軍隊の善さは、その秩序にもあるが、また〔その上に立つ〕指揮官も善でなくてはならないから。ただしそこでは、善はより多く指揮官のがわにある、なぜなら、指揮官はその軍隊の秩序に依って存するのではなく、かえって指揮官〔の善〕に依ってその秩序〔の善さ〕が存するのであるから」(アリストテレス全集旧 12, pp.430-1) ; トマス・アクィナス『命題集』註解 第 3 卷第 23 区分第 3 問題第 1 項第 1 小問題主文 (SS3, p.743) 「諸々の秩序づけられた能動者において諸々の第二の能動者の諸目的は、宇宙全体が善——それは神である——に対して秩序づけられるように、第一の能動者の目的に対して秩序づけられるのであり、それは、哲学者〔アリストテレス〕が『形而上学』第 11 巻で言うように、いわば軍隊が指揮官の善に対して秩序づけられるようにしてである」; 第 33 区分第 1 項第 4 小問題主文 (p.1078) 「軍事術は、軍隊の指揮官に適合する「指揮官に関わるもの」と、「端的に軍事に関わるもの」に分割されうる」; 第 4 卷第 19 区分第 2 問題第 2 項第 1 小問題主文 (SS4, p.992) 「神法の諸々の掟を通じて人間たちは十分にこの生において秩序づけられる。ところで、哲学者〔アリストテレス〕が『形而上学』第 12 巻で言うように、秩序が二通りある——「一方は」それによって軍隊全体が指揮官に対して秩序づけられ、「他方は」それによって軍隊の内の個々の人々が互いに秩序づけられる——のと同様に、そのようにしてこの生での社交においても、何らかの共同体に集結しているすべての人々の秩序は二通り——「一方は」長〔*praelatus*〕に対するものであり、「他方は」個々の人々同士のものである——ある」; 『定期討論集 真理について』第 5 問題第 3 項主文「軍隊において我々は二つの秩序を見出す。一つは、軍隊の諸部分がそれによって相互に秩序づけられる秩序である。もう一つは諸部分が外的な善、即ち指揮官の善へとそれによって秩序づけられる秩序である。そして軍隊の諸部分が相互にそれによって秩序づけられるその秩序は、軍隊全体がそれによって指揮官に秩序づけられるその秩序のために存在している。それ故、もし指揮官への秩序が存在しないとすると、軍隊の諸部分の相互への秩序も存在しないことになる」(山本 d, p.116) ; 『対異教徒大全』第 1 卷第 78 章「哲學者に従へば (形而上学、第一二) 世界には秩序の二通りの善が見出される。その一つは、即ち、全宇宙がその外にある所のものに對して、丁度、軍隊が司令官に對して從屬關係にある如く、秩序附けられてゐることによるのであり、他は、宇宙の諸部分が、例へば軍隊の部分が相互に對するが如く、相互に秩序關係にあることによるものである」(酒井, p.340) ; 『神学大全』第 1 部第 103 問題第 2 項第 3 異論解答「宇宙の目的はもとよりそのうちにおける或る善、即ち宇宙の秩序なのであるが、この善は然し究極的な目的ではなく、それは却って、外なる善を究極の目的としてこれにまで秩序づけられているものなのであって、それはちょうど軍隊の秩序がやはり指揮官にまで秩序づけられているものなるに比せられうること、『形而上学』第十二巻にいうごとくである」(神学大全 8, p.8) ; 第 108 問題第 6 項主文「『形而上学』第十二巻にいうように、神は被造物の目的たること、あたかも将軍が軍隊の目的であるごとくであるところから、いまの場合における序列の或る似姿が人間世界のことがらにおいて觀られうるのである」(p.132) ; 『アリストテレス「倫理学」註解』第 1 卷第 1 章 (L.47.1, p.3, l.7 - p.4, l.14) 「諸事物においては二通りの秩序が見出される。まず一方は、何らかの全体ないし何らかの多数性の諸部分同士の秩序である一方で、他方は目的に對する諸事物の秩序であり、後者の秩序は前者の秩序よりも主要なものである。それは、哲学者〔アリストテレス〕が『形而上学』第 11 巻で言うように、軍隊の諸部分同士の秩序は指揮官に對する軍隊全体の秩序のためにあるようにしてである」; 第 6 章 (p.22, ll.90-3) 「アリストテレス自身も『形而上学』第 12 巻で、宇宙全体から分離された或る善——軍隊が指揮官の善に對するよう宇宙全体がそれに秩序づけられる——を措定する」; 『神学大全』第 2-1 部第 5 問題第 6 項第 1 異論「ものごとのあいだに見出される秩序に二通りある。一つはすなわち、宇宙の諸部分の相互のあいだにおける秩序であり、いま一つは、宇宙全体の「宇宙の外なる善」に對する秩序であるが、『形而上学』第十二巻における所論のごとく、第一の秩序は第二の秩序に對して、これを目的とするもののごとき仕方でも秩序づけられているのであって、それはちょうど軍隊の諸部分の相互のあいだの秩序が、全軍隊のその指揮官に對

する秩序のゆえに存するのと同様である」(神学大全 9, pp.136-7) ; 第 9 問題第 1 項主文「「普遍目的にかかわる技術ないし能力」が、「普遍目的のもとに包括されるごとき特殊目的にかかわる技術ないし能力」を、はたらくことにまで動かすということはまったく通常のこななのであって、たとえば、全軍隊の秩序という共通善を意図する将軍が、一編隊の秩序を意図する或る部隊長を、その命によって動かすごときはそれである」(p.208) ; 『アリストテレス「形而上学」註解』第 12 卷第 12 講「善には、それがあつた事物の目的である限りにおいて、二重の意味がある [引用者による中略]。というのも、善はそれがある目的に向かっているということから、外的な目的だからである。それはちょうど、われわれが、場所とはその場所へと動かされるところのもの目的であるという場合がそれに当たる。さらにまた、善は内的な目的でもある。形相は生成と質的变化の目的であつて、しかもすでに獲得された形相は、形相がそれに帰属するところのもののある内的な善であると言われる場合がそうである。しかし、諸部分があるなんらかの秩序づけによって一であるところのある全体の形相は、その全体自身の秩序である。それゆえに、形相はその全体の善であると結論される。 / それゆえに、アリストテレスは、宇宙全体の本性は、善と最高善とを、すなわちその固有の目的を、あたかも自身から離存したあるなんらかのもののようにもっているのか、あるいはある自然的事物の善がそれ自身の形相であるというような意味で、宇宙の諸部分のあいだの秩序の内に善と最高善をもつのであるかを問題にしているのである。 [引用者による中略] それゆえ彼はまず、宇宙は両方の仕方でも善と目的をもっていると言っている。なぜならば、すでに明示されたように、ある離存的な善があり——それは第一動者であるのだが——、天体と自然全体とは、それを目的および欲求対象の善として第一動者に依存しているからである。そして、それらにとっての目的が一つであるところのすべてのものは、目的への秩序において一致していなければならぬがゆえに、宇宙の諸部分の内に、ある秩序が見出されるに違いないのである。そしてこのように、宇宙は離存的な善のみならず秩序の善ももっているのである。 / そのような事例を、われわれは軍隊の内に見る。なぜなら、軍隊の善は、軍隊の秩序それ自身の内にも、軍隊を指揮する指揮官の内にも存在するからである。しかし、軍隊の善は、秩序の内によりも、むしろ指揮官の内にある。なぜならば、目的は、目的へ向かっているところの者たちより、その善性においてより卓越しているからである。一方、軍隊の秩序は指揮官の善によって、すなわち勝利という結果を得ようとする指揮官の意志によって成就されるべきものなのである。しかし、その逆は真実ではない。すなわち、指揮官の善は秩序の善のためにあるということである」(中世思想原典集成 14, pp.476-7) など。

³⁶ Cf. 『ローマの信徒への手紙』第 13 章第 1 節「人は皆、上に立つ權威に従うべきです。神に由来しない權威はなく、今ある權威はすべて神によって立てられたものだからです」(新共同訳)。

³⁷ G&S (p.193) に従つて、《IV》を《VIII》と読み替へる。

³⁸ Cf. アリストテレス『形而上学』第 8 卷第 3 卷 1043b36-1044a2 「或る数を成す部分の幾つかがその数から減ぜられまたはその数に加えられると、たとえどれほどわずかが減ぜられようと加えられようと、もはやその数はもとの数と同じ数ではなくて異なる数であるが、あたかもそのように、定義にしても本質にしても、その構成部分のいずれかがそれから減ぜられまたはなにかがそれに加えられると、もはや同じそれではないであろう」(アリストテレス全集旧 12, p.279) ; トマス・アキナス『アリストテレス「形而上学」註解』第 8 卷第 3 講 (EM, p.412, n.1723) 「そしてアリストテレスは「もし何かか或る数に対して付加ないし [その数から] 除去されるとするなら、たとえその何かか最小のものであつても、それは種に即しては同じ数ではないことになる」と言う。その理由は次の通りである。諸々の数において最小のものは一である。もし一が三に付加されるとするなら、数の別の種である四が出現する。それに対して、もし一が三から引かれるとするなら、また数の別の種である二が残存する。そしてこうしたことがあるのは、その最終の差異が数に種を与えるからである」。

³⁹ Cf. アリストテレス『自然学』第 3 卷第 6 章 207a8-10 「それより外にはなにものもないもの、こうしたものは終結的 [完了的] なものであり全的な [全き] ものである、というのは、それになんらの欠けるところもないもの、たとえば全き人間とか全き箱とかいうがごとき、である」(アリストテレス全集旧 3, pp.112-3) ; トマス・アキナス『「命題集」註解』第 4 卷第 44 区分第 1 問題第 3 項第 4 小問題第 4 異論 (P.7.2, p.1082a) 「至福者たちにおいては復活の後に至福で完全な快さがあることになる。しかるに、そのような快さはすべての楽しみを内包する。なぜなら、至福とはすべての善の集積によって満たされた状態であり、完全なものとはそれに何も欠けていないものことだからである」 ; 『定期討論集 真理について』第 2 問題第 3 項第 13 異論解答「完全性 (完成) という名称は、もし厳密に解されると、神

のうちに措定することはできない。何故なら、何ものも作られたものでなければ完成されたものではないからである。ところで、神において、完全性という名称は積極的によりもむしろ否定的に理解される。即ち、神が完全であると言われるのは、全てのものの何ものも神には欠けていないからであって、神のうちに完全性への可能態にある或るものがあり、そのものはそのものの現実態であるものによって完成されている、といったことの故ではない(山本 a, p.140)；『神学大全』第1部第4問題第1項主文「ものが完全なものだといわれるのはそれが現実態においてあることによる。つまり、そのものの完全性の様態に応じて、その点に関するかぎり何ものも欠けるところもないごときもの、こうしたものがいずれも完全なものと呼ばれるのである」(神学大全 1, p.80)；第5問題第5項主文「完全なものとは、そのものの完全性の様態に従って、そのかぎり何ら欠けるところのないごときものをいう」(pp.106-7)；第73問題第1項第3異論「『完全なるもの』とは、その所有すべき如何なるものもそこには欠けていないごときものをいう」(神学大全 5, p.119)；第91問題第3項第2異論「完全なものとは何ら欠けるところなきもののごとである」(神学大全 7, p.24)；『アリストテレス「自然学」註解』第3巻第6章(第11講)第4節(L.2, p.136ab)「他方で、その内の何も云々のもの」と言う際に、アリストテレスは次のような論理で「無限に関する」古代人たちの定義は不適合であることを証明する。「その内の何も外にはないもの」とは「完全なもの」および「全体」の定義である。そのことをアリストテレスは次のように証明する。すなわち、各々の全体は「何もそれには欠けていないもの」として定義される。例えば、われわれが人間全体ないし箱全体——それらにおいては、それらが持つべきものどもの内の何ものも欠けていない——のことを言う場合のごとである。そしてこうしたことを、このないしあの個別的なものであるような何らかの個々のもの全体においてわれわれが言うのと同様に、こうした論理は真にかつ固有に全体であるものにおいても、すなわち宇宙——その外には端的に何もない——においても適合する。ところで、何らかのものが欠けているのは何らかの内的なものの不在を通じてであるのだから、その場合にその何らかのものは全体ではない。したがって、かくして「全体とはその内の何も外にはないものである」ということが全体の定義であることは明白である。しかるに、「全体」および「完全なもの」は、全くもって同じものであるか、あるいは本性に即して近接的である。そしてアリストテレスがこうしたことを言うのは、「全体」は諸々の単純なもの——それらは諸部分を持たないが、しかしながら、それらにおいてわれわれは「完全なもの」という名称を使う——においては見出されないからである。したがって、こうしたことを通じて「完全なものとはその内の何もその外にはないものである」ということは明白である。しかるに、目的を欠くいかなるものも完全ではない。なぜなら、目的は各々のものの完全性だからである。他方で、目的とはそれに目的があるものの終極である。したがって、いかなる無限で限界づけられていないものも完全ではない。それゆえ、完全なものの定義、すなわち「その内の何も外にはない」ということが無限なものには適合しない；『神学大全』第2-2部第44問題第4項第2異論『『自然学』第三巻で述べられているごとく、『全体とか完全とかは、欠けるものが何もないところのもの。』の謂である」(神学大全 17, p.146)；第171問題第4項第2異論「預言は『神的啓示』であり、それゆえに完全である。そのことはすべての預言可能なことが預言者に啓示されるのでなかったら、ありえなかったであろう。なぜなら、『自然学』第三巻(第六章 207a8)において言われているごとく、完全なものとは「何ひとつ欠けていないもの」のごとだからである」(神学大全 23, pp.17-8)；第184問題第2項第2異論『『自然学』第三巻に言われるように、『完全なものとは、それに何も欠けないもののごとである。』(神学大全 24, p.16)；第188問題第8項主文「単独者は、本来、自己充足的でなければならぬ。自己充足的とは、自己に何も欠けないことであって、それは完全者の特質に属する」(p.172)；第3部第27問題第5項第2異論「満ちあふれて完全であるものにたいしては、何かを付け加える余地はない。なぜなら、『自然学』第三巻で言われているように、「完全なものとは何ひとつ欠けるところのないもの」であるからである」(神学大全 32, p.21)；『アリストテレスの諸権威』(Hamesse, p.148, n.110, l.77)「全体および完全なものとはそれに何も欠けていないものである」。

⁴⁰ Cf. ディオニュシオス・アレオパギタス『神名論』第5章第4節「神は或る仕方では存在するものではなく、単純かつ無限にすべての存在を自らの内に包括し先取りしている」(キリスト教神秘主義著作集 1, p.210)；トマス・アクィナス『対異教徒大全』第1巻第28章「ディオニシウスも亦いふてゐる(神名論、五)、『神は何か或仕方にて於て現在するといふものではなく、単純に且言葉で盡し得ない仕方、全存在を自らの中に取り入れて居り、且前以つて取入れてゐるのである』と」(酒井, pp.137-8)。

⁴¹ Cf. トマス・アクィナス『対異教徒大全』第2巻第93章(L.13, p.563b, ll.15-25)「さらには、分離さ

れた諸実体は諸天体よりも完全である。しかるに、諸天体においては、それらの完全性のゆえに、一つの種には一つの個体しか見出されない。なぜなら、特に太陽や月において明らかなように、それらの内の各々のものは自分の種の質料全体から成立しているからでもあり、また、その種がそれに対して秩序づけられているものを宇宙において満たすための種の力が一つの個体において完全な仕方であるからでもある。したがって、ましてなおさら分離された諸実体においては、一つの種には一つの個体しか見出されない。

⁴² 註3を見よ。

⁴³ 註3を見よ。

⁴⁴ Cf. トマス・アクィナス『定期討論集 霊的被造物について』第8項主文 (L.24.2, p.82, ll.270-4) 「かくして、すべての天使は、神——それは純粹現実態であり無限の完全性にある——とのより多いないしより少ない近接性に基づいて、諸々の単純な形相のより多いおよびより少ない完全性に即して、互いに種という点で異なるということが残される」。

⁴⁵ Cf. トマス・アクィナス『知性の一性について』第5章「分離実体は個体であり個別的なものである。しかし質料によって個体化されているのではない。分離実体は本来的に他者において存在することのないものであり、したがってまた分離実体が多くのものに分有されるということもないのである」(中世思想原典集成 14, p.561); 『神学大全』第3部第77問題第2項主文「複数のもののうちに存在することはできない、ということが個体の本質側面に属することだからである。ところで、このことは二つの仕方では起ることが可能である。その一つは、その本性からして或るものうちに存在するようなものではないから、ということである。そして、それ自体で自存しているところの非質料的形相が、またそれ自体によって個別的でもあるのはこの仕方においてである。もう一つは、実体的あるいは付帯的形相は、その本性からしてたしかに或るものにおいて存在するようなものであるが、しかし複数のもののうちに存在するようなものではない、ということによる。たとえば、この物体のうちに在るところのこの白さ、がそうである」(神学大全 43, p.128)。

⁴⁶ 註45を見よ。

⁴⁷ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第11巻第15章第19節「適切にも聖書は、あらゆる罪の始まりは高慢であると断定して、「あらゆる罪の始まりは高慢である」(シラ一〇・一三)と述べている。この証言に使徒が「食欲はすべての悪の根です」(Iテモ六・一〇)と述べていることも、的確に対応している。食欲を一般的に解して、自らの優越性の故に、また自己固有のものへのある種の偏愛の故に、ふさわしい以上に欲求することと考えてである。この欲を欠如的なものと呼ぶことによって、ラテン語はこの欲に極めて適切な名を与えた。というのもこの名は、増大よりもむしろ損失を表わしていることは明白だからである。すべての欠如は減少なのであるから」(アウグスティヌス著作集 17, pp.64-5); アルベルトゥス・マグヌス『アリストテレス「倫理学」註解』第9巻第10講 (Col.14.2, p.691, ll.52-7) 「誰であれ或る「欠如的な」愛によって自分の為すこと [opus proprium] に引き込まれるのだから、愛は理性の目を閉じさせ、誰であれ選択についても、また、[心の] 内側にあるものの、或る外側の諸々のしるしを通じて他の人々の為すことにおいて明白化されるものどもについても正しく判断できなくなってしまう」；トマス・アクィナス『「ガラテヤの信徒への手紙」講義』第2章第6講 (SEP1, p.588, n.107) 「人間なら誰でも、或る欠如的な感受 [affectum] ——それによってその人間は自分のことを求める——を持っている」；『アリストテレス「倫理学」註解』第6巻第7章 (L.47.2, p.358, ll.135-9) 「人間たちは、欠如的な愛——それと無秩序な仕方では人間たちは関わっている——のゆえに、自分自身にとって善であることだけを求め、各々のものはそれだけを、すなわち自身にとって善であることをなさなければならぬと考えている」；第9巻第10章 (p.536, ll.121-3) 「各々の人は、自分自身と関わらせている欠如的な感受 [affectum] のゆえに、固有のものどもにおいては判断をより一層欠落している」。

⁴⁸ Cf. ディオニュシオス・アレオパギテス『天位階論』第12章第1-2節「もしも最下位の階級が上位の階級の〔特性の〕全体を分有することはできないのであるならば、われわれの教会の司令者〔である祭司〕が聖書によって「全能の主の使者」〔マラ二：七〕と呼ばれているのはどういう理由によるのであろうか。／だが、この呼び方は前に規定されたことに対立するものではないと私は思う。というのも、最下位の階級は上位の階級の普遍的な優れた力には及ばないと、われわれは言っているのだからである。すなわち、最下位の階級は、すべてのものを調和のとれた仕方では結合する唯一の交わりにもとづいて、部分的に、自分の能力に応じて、[そのような力を] 分有しているのである。／たとえば、聖なるケル

ビムの階級ははるかに高い知恵と知識を分有しているけれども、その下の諸存在の諸階級自身もケルビムの階級と比べると部分的で劣ったものではあるがやはり知恵と知識を分有しているのである」(中世思想原典集成 3, p.395)。

⁴⁹ 本項本文における「第二の論理は宇宙の秩序に基づいて解される」に始まる段落を見よ。

⁵⁰ 註9を見よ。

⁵¹ 註53を見よ。

⁵² Cf. トマス・アクィナス『原因論』註解』第4講「上位の存在は知性者のうちにも、魂のうちにも存しているのであるが、然し知性者そのものにおいてより前に観察されるのは、知性者の特質よりも、むしろ、存在そのものなのであり、また、魂においても同様なのである。そして、このゆえにこそ、彼〔すなわち原因論』著者のこと——引用者註〕は、それが魂の上であり、知性者の上にあるということを始めに先ず語ったのである。そこで、この諸々の知性者のうちに分有されている存在について、何故にそれが最高度に単一化されたものであるかという理由を指摘する。すなわち、彼は次のごとくいう。こうしたことが生ずるのは、自存する『純粋なる存在』であり、且つ、本質に基づく何らかの種差の『多様性がそのうちに見出だされぬとき、分有されたのではない真に一なるもの』であるところの第一原因への『その近接の為に』である。ところで、自体的に一であるものにより近いものは、より高度に一性を分有するものとしてより高度に『単一化されたもの』なのである。だからして、第一原因に最も近接したものであるところの知性者が、最高度に単一化された存在を有するものなのである」(原因論, p.29)。

⁵³ Cf. ディオニュシオス・アレオパギテス『天上位階論』第14章「この世界を超えた知性の淨福なる群れはたくさんあって、〔その数は〕われわれが物を数えるという貧弱で有限な限度を超えていて、ただこの世を超えた天上的な彼らの知性と知識から認識のうえで定められるだけなのである」(中世思想原典集成 3, p.404)。

⁵⁴ Cf. アリストテレス『天について』第3巻第1章 299a6-11「立体が平面から構成され、平面は線から、線は点から構成されることは明らかに同一の論に含まれる。だがそうであれば、必ずしも線の部分は線であることにはならないが、しかしこれについてはすでに動についての議論において、不可分な長さは存在しないことが考察済みである」(アリストテレス全集新 5, p.144)；『魂について』第1巻第4章 408b32-409a7「これまで言及した見解のなかで最も不合理なのは、魂は自己自身を動かす数であるという説である。というのも、このように主張する人々は、まずそもそも魂が動くという見解から帰結する不可能な事柄ばかりでなく、さらに魂を数であると語ることから帰結する固有の困難を引き受けるはめになるからである。〔引用者による中略〕この見解を唱える人々は、線が動くことで面が、点が動くことで線ができることを主張するのであるから、(単位的-)の動きも線になるであろう。なぜなら、点とは位置をもつ(単位的-)であり、また魂に属する数は、もとより、どこかに存在し位置をもつからである」(アリストテレス全集 7, p.48)；トマス・アクィナス『アリストテレス「魂について」註解』第1巻第11章 (L.45.1, p.54, ll.63-5)「プラトン主義者たちは、点の運動は線をもたらず一方で、動かされた線は面をもたらずのに対して、面は物体をもたらずと言う」；『アリストテレス「天と地について」註解』第3巻第1章(第3講)第3節 (L.3, p.235b)「もしプラトンが指定したように諸物体が諸々の面から複合されるということが成立するならば、諸々の面は諸々の線から、そして諸々の線は諸々の点から複合されるということが帰結することになる。そのようなわけで、線の部分が線であるということが必然的ではなくなる」。

⁵⁵ 註53を見よ。

⁵⁶ 註52を見よ。

⁵⁷ Cf. ディオニュシオス・アレオパギテス『神名論』第7章第3節「神の知恵は、常に第一次的存在者の最後のものを第二次的存在者の最初のものとして結合し、万物をただ一つの協調と調和にあるものとして美しくつくりあげるのである」(キリスト教神秘主義著作集 1, p.226)；トマス・アクィナス『神名論』註解』第7章第4講 (Pera, p.275, n.733)「神の知恵がこうした秩序のあり方を結び合わせている。なぜなら、神の知恵は、物的被造物の最上位のもの、すなわち人間の身体が知性的本性の内の最下位のもの、すなわち理性的魂に合一するような仕方、で、「常に第一のものどもの終わりのものども」、すなわち最上のももの内の最下位のもものどもを「第二のももの内の始めのもものども」、すなわちより下位のももの最上位のもものに結合するからである」。

⁵⁸ Cf. トマス・アキナス『定期討論集 霊的被造物について』第8項主文(L.24.2, p.82, l.262 - p.83, l.312) 「他方で、宇宙のより上位の部分、すなわち諸天体においては、附帯的ではなくて自体的にのみ秩序が見出される。というのも、すべての天体は互いに種という点で異なるのであり、それらにおいては、一つの種に複数の個体があるのではなくて、たった一つの太陽やたった一つの月があるのであって、他のものどもについてもそうだからである。したがって、ましてなおさら宇宙の最上位の部分においては、附帯的にてあって自体的にはなしに秩序づけられたものは全く見出されない。かくして、すべての天使は、神——それは純粹現実態であり無限の完全性にある——とのより多いしより少ない近接性に基づいて、諸々の単純な形相のより多いおよびより少ない完全性に即して、互いに種という点で異なるということが残される。[引用者による中略] 他方で、宇宙のより上位の部分においては完全性のより高位の段階が見出される。そこにあるものどもにおいては、太陽のような一つの個体が、固有の種に属するものどもの内の何もそれに欠けていないというようにして完全である。それゆえ、種の質料全体も一つの個体の下に包含される。そして他の諸天体についても同様である。したがって、ましてなおさら被造的諸事物の最上位の部分——それは神に最も近接的である——、すなわち天使たちにおいては、種全体に属するものどもの内の何も一つの個体に欠けていないような完全性が見出されるのであるからして、一つの種において複数の個体があるということにはならないだろう」。

⁵⁹ 本項第1異論解答を見よ。

⁶⁰ Cf. トマス・アキナス『定期討論集 霊的被造物について』第8項主文(L.24.2, p.82, ll.284 - p.83, l.301) 「他方で、諸事物の最下位の部分——それは生成消滅しうるものを含む——における何らかの個体は、自分の個体化の論理に即して自分に属するものを何であれ持つということに基づいては完全なものとして見出される一方で、自分の種の本性に属するものを何であれ持つわけではない。というのも、自分の種の本性が他の諸々の個体においても見出されるからである。こうしたことが不完全性に属するのが明白に窺えるのは、生成しうる動物たち——それらにおいて一方のものは共生のために自分の種の他方のものを必要とする——においてだけではなくて、いかなる仕方であれ種子から生成したすべての動物——それらにおいてオスは生成するために自分の種のメスを必要とする——においても、はてはすべての生成消滅しうるもの——それらにおいては、自らの可滅性のゆえに一つの個体においては永続的に保存されえない種の本性が複数のものにおいて保存されるということのために、一つの種の諸々の個体の多数性が必要である——においてもそうである」。

⁶¹ 註58を見よ。

⁶² Cf. トマス・アキナス『定期討論集 霊的被造物について』第8項主文(L.24.2, p.80, ll.190-204) 「天使たちは、上で認められたように質料を欠いて自存する単純な形相であるか、あるいは、質料と形相から複合された形相であるかであると言うのが必然である。ところで、もし天使が質料から抽象された単純な形相であるなら、一つの種にある複数の天使を思い描くことさえ不可能である。なぜなら、どれほど質料的で最下位のものであっても形相であれば何であれ、もしそれが存在することに即してか知性に即してか抽象されたものとして指定されるとするなら、一つの種において一つの形相としてのみ残存するからである。例えば、すべての基体を欠いて自存する白さが知解されると、複数の白さを指定することは不可能であることになる。というのも、このないしあの基体においてあるということを通じてのみ、この白さはあの白さと異なるということをお互いに見るからである。また同様に、もし人間性が抽象されたものとしてあったとするなら、それはたった一つのものでしかないことになってしまっただろう」。

⁶³ Cf. アリストテレス『魂について』第1巻第2章 404b11-8 「エンペドクレスが、魂はすべての基本要素から構成されるとともにこれら基本要素のそれぞれもまた魂であるとして、次のように語っている [引用者による中略]。／なぜならわれわれは見る、土によって土を、水によって水を、／空気によって神的な空気を、火によって焼き滅ぼす火を、／愛によって愛を、憎しみを陰鬱な憎しみによって見るのだから。／これと同じ仕方、プラトンも『ティマイオス』のなかで、魂を基本要素から作り上げている。というのも、彼によれば、似たものは似たものによって知られるのであり、また各事物は諸々の始原から構成されるからである」(アリストテレス全集新7, p.26) ; トマス・アキナス『アリストテレス「魂について」註解』第1巻第4章(L.45.1, p.19, ll.45-65) 「そして第一に、次のように言うことでアリストテレスはエンペドクレスの意見を指定する。すなわち、感覚を通じて魂を考察した古代の哲学者たちは、魂は諸元素から成ると言い、しかも或る一つの原理を作る人々は、その原理が魂であると言い、多数の原理を作る人々は、その諸原理に基づいて魂が複合されると言う。例えば「エンペドクレスは」、

魂は「すべての元素に基づいて」と言い、「そしてその諸元素の各々が魂である」と言う。こうしたことをめぐっては次のことが知られるべきである。エンペドクレスは六つの原理を措定した。四つは質料的原理で、すなわち土、水、空気、火のことであり、二つは能動のおよび受動的原理で、すなわち争い [lis] と愛 [amicitia] のことである。そしてそれゆえ、魂が諸原理から複合されると措定していたことに基づいて、魂と感覚は「自分が」措定していたこのような諸原理に基づいているとエンペドクレスは言った。すなわち、土に基づいているということに即して土を、エーテル、すなわち空気に基づいているということに即して空気を、それに対して、水に基づいて水を、だが火に基づいては火をわれわれが認識するということは「明白であり」、そして調和を通じて調和を、悲しみの不調和に基づいては不調和をわれわれは認識する。そしてエンペドクレスがそこで「悲しみ」と措定しているのは、自分の諸著作を韻律によって著述したからである。

⁶⁴ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第4章 429a18-22 「知性がすべての事象を知性認識する以上は、アナクサゴラスの主張するように、それが支配するためには、すなわち認識するためには、混交してないものであることは必然である。なぜなら、それ自身が特定の現れ方を呈するとすれば、それとは異質なものを妨げ排斥してしまうからである。したがって、知性には、ほかならぬ「可能的である」ということ以外には、いかなる本性であってもいっさい属さないのである」(アリストテレス全集新 7. p.146); トマス・アクィナス『命題集』註解第2巻第17区分第2問題第1項第4異論解答 (SS2, p.430) 「註釈家 [アヴェロエス] が [アリストテレス] 『魂について』 第3巻 [に対する註解] において言うように、何らかのものどもを受容するものは、いかなる規定された本性をも欠如しているものであるのではなくて、瞳が諸々の色の本性によってそうであるように、受容されるものどもの本性によって纏われないでいるのでなければならぬ」; 『定期討論集 真理について』 第22問題第1項第8異論 「認識能力は認識するためには、その対象の形象を欠いているのでなければならぬ。ちょうど、視覚が色を欠いているように」(山本 c, p.175); 『第10任意討論集』 第3問題第2項主文 (L.25.1, p.133, ll.79-83) 「したがって、もし魂が何らかの器官を通じて知解したとするなら、その器官はすべての可感的形相を欠いているのでなければならぬ。というのも、魂はすべての可感的形相を知解するよう本性づけられているからである。それは、視覚がすべての色を認識することができるということのために瞳がすべての色を欠いていると同様である」; 『対異教徒大全』 第2巻第59章 「可能知性はすべての可感的事物の形象を受け取り、その形象に対して可能態として存在しているとすれば、知性はすべての形象を「欠いている」のでなければならぬ。たとえば、色のすべての形象を受け取る瞳にはどんな色も欠けている。というのも、もし瞳がそれ自体で何らかの色を持っているとしたら、その色によって他の色を見ることが妨げられてしまうであろう。いやそれどころか、どんなものもその [瞳の持つ] 色のもとでしか見られないことになるであろう」(川添, p.41); 『定期討論集 魂について』 第2問題主文 「何らかのものを受け取ることができ、それらに対して可能態にあるものは全て、それ自身における限りはそれらを全く持たないもの [引用者による中略] である。たとえば、あらゆる色を受け取ることができるところの瞳が、全ての色を欠いているように」(井上 a, p.165); 第8問題主文 (L.24.1, p.67, ll.235-8) 「実際、視覚の器官、すなわち瞳は、全くもって白いものと黒いものを欠いており、普遍的には色の類すべてを欠いている。そして聴覚や嗅覚においても同様である」; 第14問題主文 「あらゆる可感的事物の本性を受けとり得るような身体器官を見いだすことはできないのであり、それはとりわけ、受けとるものは受けとられるものの本性をまともぬものでなければならぬからである。ちょうど瞳が色を持たぬがごとくに」(井上 c, p.45); 『神学大全』 第1部第56問題第2項第1異論 「アリストテレスは『デ・アニマ』 第三巻にいう。人間知性が、かりにもし、自らのうちに、可感的事物の本性に数えられるごとき或る本性を持っているとしたならば、そうした本性が内部に存するかぎり、諸々の外部のもの知られることの妨げとなるに相違ないのであって、それはちょうど、瞳の場合、もしそれが或る一つの色を帯びているとしたならば、すべての色を見ることが不可能になるに相違ないので事情を同じくする、と」(神学大全 4, p.226); 第91問題第1項第3異論解答 「瞳は、すべての色に対して可能態にあらんがために、自らは色を欠いている」(神学大全 7, p.19); 『アリストテレス「魂について」註解』 第3巻第1章 (L.45.1, p.203, ll.131-50) 「実際、何かに対して可能態においてありその何かを受容するものはすべて、それがそれに対して現実態においてあり受容する当のものを欠いている。例えば、瞳——それは諸々の色に対して可能態においてありその色を受容するものである——はすべての色を欠いている。しかるに、感覚が諸々の可感的なものに対するように、われわれの知性は諸々の可知的なものを、その知性がその可知的

なものに対して可能態においてありその可知的なものを受け入れるものであるというような仕方では知解する。それゆえ、われわれの知性は、それを知解することが本性づけられているすべての事物を欠いている。したがって、われわれの知性はすべての可感的で物的な事物を知解することが本性づけられているのだから、視覚が色を認識するものであるということのゆえに色を欠いている——というのも、もし視覚が何らかの諸々の色を持っていたとするなら、その色が他の諸々の色を見ることを妨げてしまったらからである——のと同様に、その知性はすべての物的本性を欠いているのでなければならぬ。熱のある人の舌——それは何らかの苦い体液を持つ——が甘い味を知覚できないのと同様に、知性も、もし何らかの規定された本性を持っていたとするなら、自身に共本性的なそうした本性は、知性を他の諸々の本性の認識から妨げてしまったらう；『籤について』第4章 (L.43, p.233, ll.84-6) 「例えば、もし瞳が何らかの色を備えていたとするなら、目はすべての色を見るができなかつたらう；『知性の一性について』第1章「もしならんかの色が瞳に内在していたら、その内在する色が障害となって外から来る色が見えなくなり、目が他のものを見ることをならんかの仕方では妨げるであらう」(中世思想原典集成 14, p.518)。

⁶⁵ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第2章 426a15-7 「感覚されうるものの活動実現状態と感覚する能力の活動実現状態とは一つであり、「まさにそれであること」の規定という点で異なる」(アリストテレス全集新 7, p.132)；トマス・アクィナス『対異教徒大全』第1巻第51章「現実の中の可知的なものは、現実の中の知性であることは、(現実の中の)可感的なものが現実の中の感覚であるのと同様である」(酒井, p.228)；第2巻第59章「現実態にある感覚と現実態にある可感的なもの」とがそうであるように、「現実態にある知性と現実態にある可知的なものとは一つなのである」(川添, p.49)；第74章「感覚が現実態になるのはそれが「現実態にある感覚されたものと同じ」であることによるし、それと同様に「現実態にある知性は現実態において知性認識されたもの」なのである」(p.187)；第101章 (L.13, p.600a, ll.1-7) 「現実態における感覚が現実態において可感的なものであるのと同様に、現実態における知性は現実態において知解されるものである」一方、同じものが現実態において同時に多数であることはできないのだから、既に上述のように、分離された実体の知性が諸々の可知的なものの相異なる形象を持つことは不可能であると思われる；『神学大全』第1部第55問題第1項第2異論解答「現実態における感覚」が「現実態における可感的なるもの」であるとは、『デ・アニマ』第三巻における所説であるが、その意味も決して、感覚の力そのものが、「感覚における可感的なるものの似姿」そのものである、などというにあるのではなく、それは却って、両者を現実態ならびに可能態として、そこから一なるものが生ずる、という意味にはかならない」(神学大全 4, p.210)；第79問題第3項主文「如何なるものも、何らかの現実的な有によるのではなくしては可能態から現実態へ導かれることはないのであって、それは例えば、感覚が現実態における「可感的なるもの」によって現実態におけるものとなるごとくである」(神学大全 6, pp.150-1)；第87問題第1項第3異論解答「ちょうど現実態における「感覚」が「可感的なるもの」と一つであるのは「可感的なるもの」の似姿のゆえであり、こうした似姿が現実態における感覚の形相となっているのであるように、それと同じく、現実態における「知性」が現実態における「知性認識されるもの」と一つであるのは「知性認識される事物」の似姿のゆえであり、こうした似姿がつまりは現実態における知性の形相たるのである」(p.346)。

⁶⁶ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第4章 430a2-5 「知性それ自身も、諸々の知性認識されうるものと同じように知性認識されうるものである。素材を伴わないもの場合には、知性認識しているものと知性認識されているものとは同一だからである。実際に、観想的知識とそのような仕方では知られるものとは同一である」(アリストテレス全集新 7, p.150)；第5章 430a19-20 「活動実現状態にある知識は、その対象となる事物・事象と同一である」(p.152)；『形而上学』第12巻第9章 1075a3-5 「およそ質料をもたない物事については、理性で思惟されるものと思惟する理性とは、互いに他ではなくて、同じものであり、その思惟は思惟されるものと一つであらう」(アリストテレス全集旧 12, p.430)；アヴェロエス『アリストテレス「魂について」大註解』第3巻第19註解「続いてアリストテレスは言う、「そして現実活動のうちにある知識は〔知られる〕事物と同一である」と。私が思うに、彼は、能動知性が質料的知性と異なるゆえんの能動知性固有の一面を示唆しているのである。すなわち、能動知性においては知識は現実態にあって、知識対象と同一であるが、質料的知性においてはそうではない。なぜなら、その認識対象はそれ自体としては知性とは別なる諸事物であるから」(中世思想原典集成 11, p.1086)；トマス・アクィナス『命題集』註解』第4巻第49区分第2問題第1項主文 (P.7.2, p.1197b - p.1198a)

「現実態における知解は現実態において可知的なものと或る仕方では一つであるのだから、被造的知性が何らかの仕方では非被造の本質となるのは困難であると思われる」；『アリストテレス「形而上学」註解』第12巻第11講「それがどのようなものであっても、質料をもたないものすべてにおいて、現実態における知性と思惟対象とは別のものではないがゆえに、質料から最も遠い第一実体においては、思惟する働きと思惟対象とは最高度に同一であることは明らかである」(中世思想原典集成14, p.469)；『対異教徒大全』第1巻第55章「吾人の知性は、數多を同時に現實に知解することは出来ない。何故なら、現實に於ける知性は、現實に知解されたものである以上、もしそれが數多のものを同時に現實に知解するとしたなら、その結果として、知性は一つの類に従つて同時に數多であるといふことになるが、此ことは不可能である」(酒井, p.239)；第2巻第55章(L.13, p.394b, ll.20-2)「可知的なものは知性の固有の完全性である。それゆえ、「現実態における知解と現実態において可知的なものは一つである」；第78章「現実態においては学知は事物と同じである」。注解者は次のように述べている。この点において「能動知性は可能知性と異なっている」。というのは、能動知性においては知性認識するものと知性認識されたものとは同一であるが、可能知性においてはそうではない、と。だがこれがアリストテレスの意図に反していることは明らかである」(川添, p.251)；第98章(p.582a, l.19 - p.582b, l.16)「アリストテレスの教えに即せば、「現実態における知性は現実態において知解されるものである」。ところで、或る一つの分離された実体が、他の実体を知解する限りで、いかにして他の実体と一つであるのかを見ることは困難である。[引用者による中略] 可知的なものはそれがそれによって知解されるものに関して知性の内部にある。ところで、いかなる実体も、ただ神——それはすべてのものにおいて本質、現前、能力を通じてある——だけを除けば、精神に流れ込まない。したがって、分離された実体が自分の本質を通じて他の実体によって知解されるのであって、その実体の他の実体における類似を通じて知解されるのではないということは不可能だと思われる。／しかもこのことは、アリストテレス——彼は、「現実態において知解されるものは現実態における知性と一つである」ということを通じて知解が生起すると措定する——の見解に即しては真でなければならない」；第99章(p.594b, ll.16-20)「さて、「完全な現実態における知性は現実態において知解されるものである」のだから、分離された実体は質料的な諸事物を知解しないということは何らかの人にとって見られる。というのも、質料的な事物が分離された実体の完全性であるということとは不適当なことだと思われるからである」；『神学大全』第1部第55問題第1項第2異論「アリストテレスの『形而上学』第十二巻、ならびに『デ・アニマ』第三巻によれば、『質料なきものにあつては、知性と知性認識されるところのものとは同じもの』なのである。然るに、「知性認識されるところのもの」が「知性認識するもの」と同じであるのは、「それによって知性認識されるところのもの」のゆえにほかならない」(神学大全4, p.208)；第87問題第1項第3異論『『デ・アニマ』第三巻にいうごとく、『質料のないものにあつては「知性」と「知性認識されるところのもの」とは同じものである。』』(神学大全6, p.341)；第3異論解答『『質料のないものにあつては「知性」と「知性認識されるところのもの」とは同じものである』と語ることは、『現実態において知性認識されるところのものにあつては「知性」と「知性認識されるもの」とは同じものである』と語るのに等しい。事実、ものが現実態において知性認識されるのは、まさしくそれが質料のないものたることによるのである」(p.346) など。

なお、註65も見よ。

⁶⁷ Cf. アリストテレス『魂について』第3巻第8章431b29「魂のうちにあるのは石そのものではなくてその形相 [引用者による中略] である」(アリストテレス全集新7, p.161)。

⁶⁸ 註66を見よ。

⁶⁹ 註17を見よ。

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院人文社会科学研究所 哲学・思想専攻/
日本学術振興会特別研究員 DC2)

※本稿は、JSPS 科研費 15J00085 の助成を受けたものである。